

平安京左京四条一坊五町跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四条一坊五町跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、新築工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

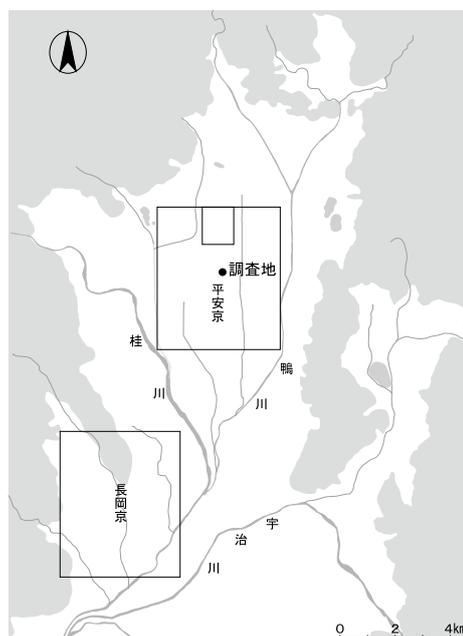
令和7年5月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（京都市番号 24 H 196（23 H 519））
- 2 調査所在地 京都市中京区壬生坊城町26-4、27-6
- 3 委 託 者 阪急阪神不動産株式会社 住宅事業本部長 古谷慎一
- 4 調査期間 2024年8月26日～2024年11月1日
- 5 調査面積 246㎡
- 6 調査担当者 松吉祐希・樋口武志
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごと通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 松吉祐希
付章：株式会社パレオ・ラボ
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理にあたっては、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝いたします。
小野映介（駒澤大学教授）、鈴木久男（元京都産業大学教授）、西山良平（京都大学名誉教授）、平尾政幸
※ 敬称略

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の契機	1
(2) 調査の方法と経過	1
2. 調査地の位置と環境	4
(1) 歴史的環境	4
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 第2面の遺構	8
(3) 第1面の遺構	8
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
(3) 瓦類	16
(4) 木製品	21
(5) 石製品	24
(6) 土製品	25
(7) 金属製品	25
(8) 動植物遺存体	26
5. ま と め	27
(1) 調査地の歴史的変遷	27
(2) 平安時代後期の将棋駒	27
付章 自然科学分析	30

図 版 目 次

図版1	遺構	第2面〔平安時代前期〕	平面図 (1:100)
図版2	遺構	第1面〔平安時代後期〕	平面図 (1:100)
図版3	遺構	第1面〔鎌倉時代〕	平面図 (1:100)
図版4	遺構	調査区北壁	断面図 (1:50)

- 図版5 遺構 調査区東壁断面図（1：50）
- 図版6 遺構 柱列1・2実測図（1：50）
- 図版7 遺構 1 2区第2面全景（北から）
2 3区第2面全景（東から）
- 図版8 遺構 1 1区第1面〔平安時代後期〕全景（北から）
2 1区第1面〔鎌倉時代〕全景（北から）
- 図版9 遺構 1 流れ24高まり検出状況（北西から）
2 流れ24高まり礎敷き検出状況（南西から）
- 図版10 遺構 1 流れ24礎敷き81検出状況（北東から）
2 3区流れ24検出状況（北東から）
- 図版11 遺構 1 流れ24ウシ下顎骨出土状況（南西から）
2 流れ24瓦出土状況（北東から）
3 流れ24漆器皿出土状況（北東から）
4 流れ24木皿出土状況（南西から）
5 流れ24櫛出土状況（西から）
6 流れ24帯金具出土状況（北東から）
- 図版12 遺構 1 柱列2掘削状況（北東から）
2 柱列2柱穴43礎板検出状況（北東から）
3 柱列2柱穴48礎板検出状況（東から）
- 図版13 遺構 1 路面2検出状況（北東から）
2 1区拡張区全景（東から）
3 1区拡張区路面2検出状況（北東から）
4 溝55掘削状況（南から）
- 図版14 遺構 1 築地35遺物出土状況（北から）
2 築地35ウシ頭蓋骨出土状況（北から）
3 土坑20遺物出土状況（南東から）
4 土坑60遺物出土状況（南西から）
5 井戸64検出状況（西から）
- 図版15 遺物 土器類1
- 図版16 遺物 土器類2
- 図版17 遺物 土器類3
- 図版18 遺物 瓦類
- 図版19 遺物 木製品
- 図版20 遺物 石製品、土製品、金属製品、骨

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：300）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	重機掘削状況（北東から）	3
図5	作業状況（北西から）	3
図6	骨取り上げ状況（北西から）	3
図7	分析サンプル採取状況（南東から）	3
図8	調査後全景（北東から）	3
図9	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図10	基本層序柱状図（1：40）	7
図11	流れ24ウシ下顎骨出土状況図（1：20）	8
図12	土坑20・60実測図（1：40）	10
図13	流れ24出土土器実測図1（1：4）	12
図14	流れ24出土土器実測図2（1：4）	13
図15	第1面の遺構出土土器実測図（1：4）	14
図16	墨書土器実測図（1：4）	16
図17	軒丸瓦拓影及び実測図（1：4）	17
図18	軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	19
図19	平瓦拓影及び実測図（1：4）	20
図20	木製品実測図1（1：4）	22
図21	木製品実測図2（1：4）	23
図22	石製品・土製品実測図（石1～5は1：2、他は1：4）	24
図23	ガラス玉（石7）	24
図24	ガラス玉（石8）	24
図25	ガラス玉（石9）	24
図26	銭貨拓影・金属製品実測図（1：2）	25

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	11
表4	土坑60出土の植物遺存体	26
表5	平安時代の将棋駒出土例一覧表	28

付 表 目 次

付表1	土器類観察表	40
-----	--------	----

平安京左京四条一坊五町跡

1. 調査経過

(1) 調査の契機 (図1)

本調査は、中京区壬生坊城町新築工事に伴う発掘調査である。調査地は京都市中京区壬生坊城町26-4、27-6に位置し、平安京左京四条一坊五町跡にあたる。調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から、平安時代の遺構の検出と、それに伴う遺物の確認を目的とした。

(2) 調査の方法と経過 (図2～8)

調査区は、排土置き場の関係から1～3区の3箇所に分けて行った。また1区北西隅に拡張区を設け、調査を行った。調査面積は、1区120㎡、2区92㎡、3区26.4㎡、拡張区7.65㎡で、総面積は約246㎡である。

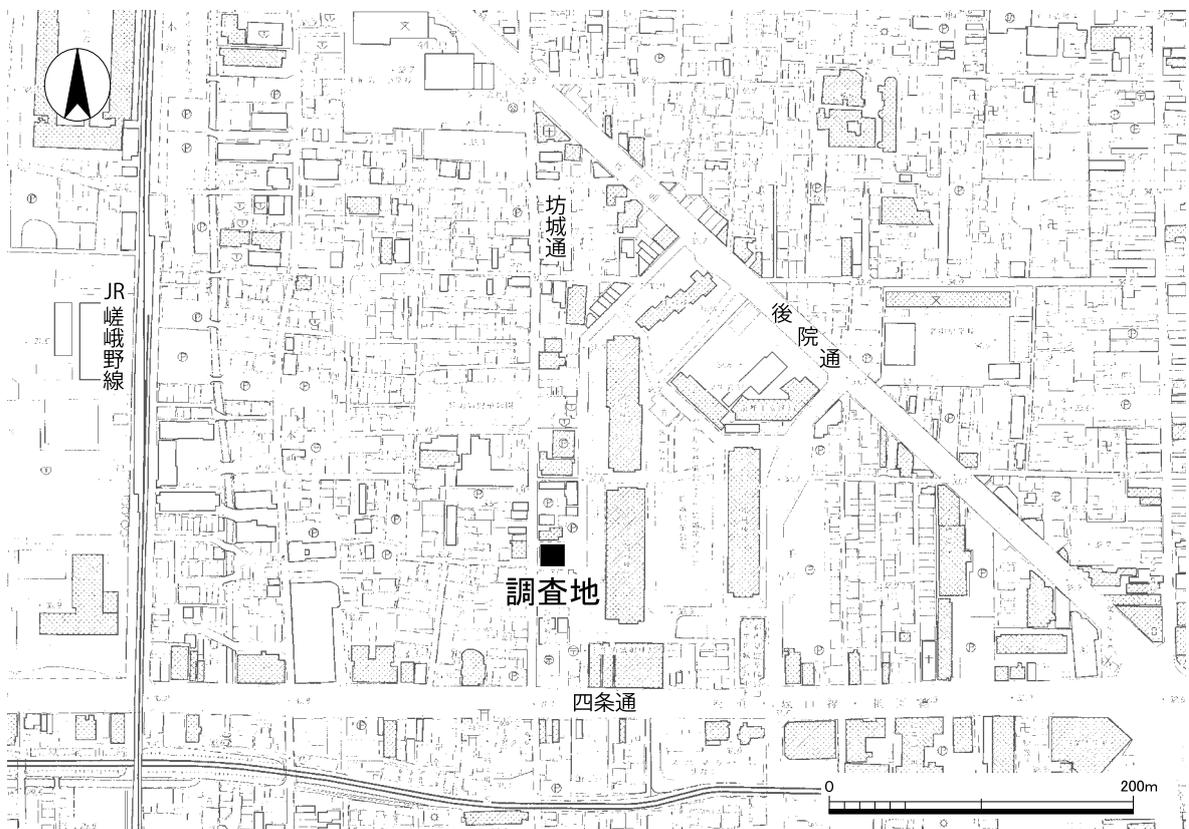


図1 調査地位置図 (1 : 5,000)

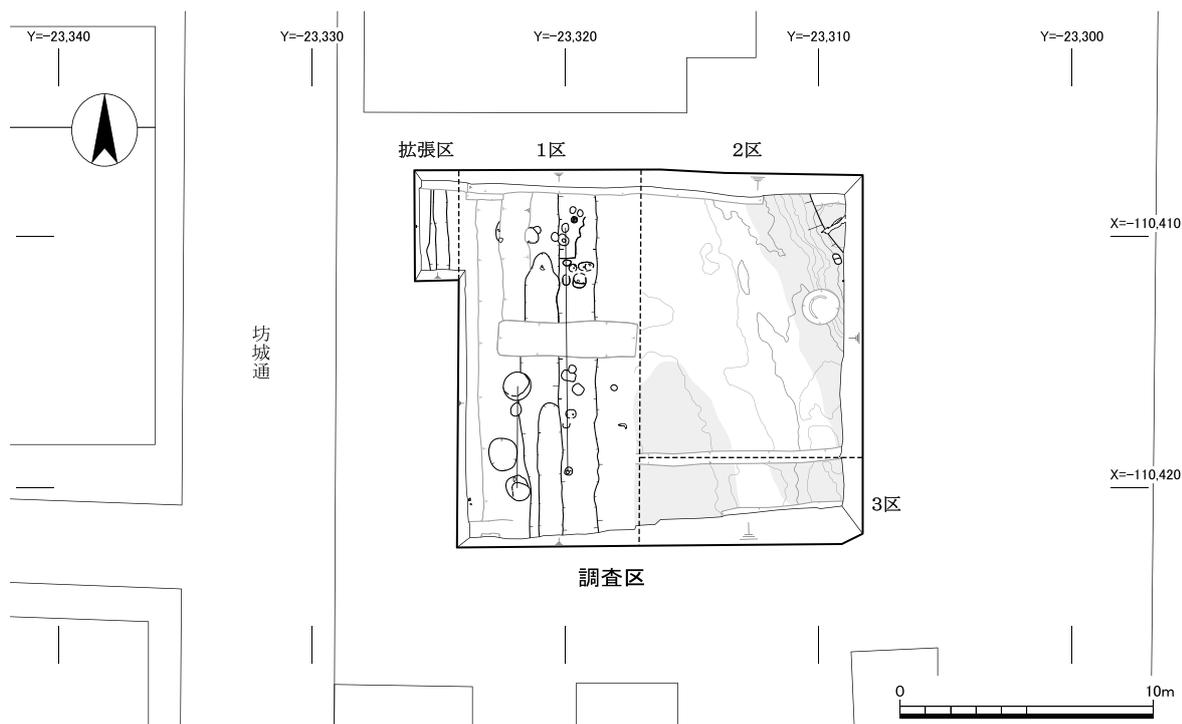


図2 調査区配置図（1：300）

調査は西側の1区から開始し、拡張区、2区、3区の順に行った。現代造成土及び中近世の整地層は重機を用いて掘削し、遺構の検出及び掘削は人力で行った。調査では、路面や柱列、溝、土坑などを検出した。検出した遺構は写真測量による平面図や土層断面図を作成し、写真撮影などの記録作業を行った。調査後は重機により埋め戻しを行った。調査期間は令和6年8月26日から令和6年11月1日である。

調査中は適宜、文化財保護課の指導及び、文化財保護課が選任した検証委員である近畿大学の網伸也教授の視察を受けた。



図3 調査前全景（南から）



図4 重機掘削状況（北東から）



図5 作業状況（北西から）



図6 骨取り上げ状況（北西から）



図7 分析サンプル採取状況（南東から）



図8 調査後全景（北東から）

2. 調査地の位置と環境

(1) 歴史的環境

調査地は、平安京左京四条一坊五町（以下、「五町」とする）の西部の西一行北三門・四門に位置し、五町は北を錦小路、東を壬生大路、南を四条大路、西を坊城小路に画される。また調査区の西端は坊城小路想定位置にあたる。

朱雀大路に隣接する左京四条一坊には、平安時代前期から後期にかけて皇族や貴族の邸宅が営まれたことが、史料により知られる。

今回の調査地である五町には、光孝天皇の皇子で、宇多天皇の同母兄の是忠親王（857 - 922）の「南院」が存在したとされる（『拾芥抄』¹⁾）。二町には平安時代中期に散位従四位下大江公仲の邸宅が存在していたが、12世紀前半には左大弁藤原為隆の邸宅となった。四町には12世紀前半に権中納言源国信（1069 - 1111）の邸宅、六町には平安時代後期に白河法皇の近臣の内蔵頭源国明（1064 - 1105）の邸宅が所在した。八町には右大臣藤原良相が天安3年（貞観元年、859）に勸学院の付属施設として延命院を建立した（『三代実録』）。九・十・十五・十六町には天元4年（981）円融天皇の離宮「四条後院」が存在した。四条後院は、元は太政大臣藤原頼忠の邸宅であった（『拾芥抄』、

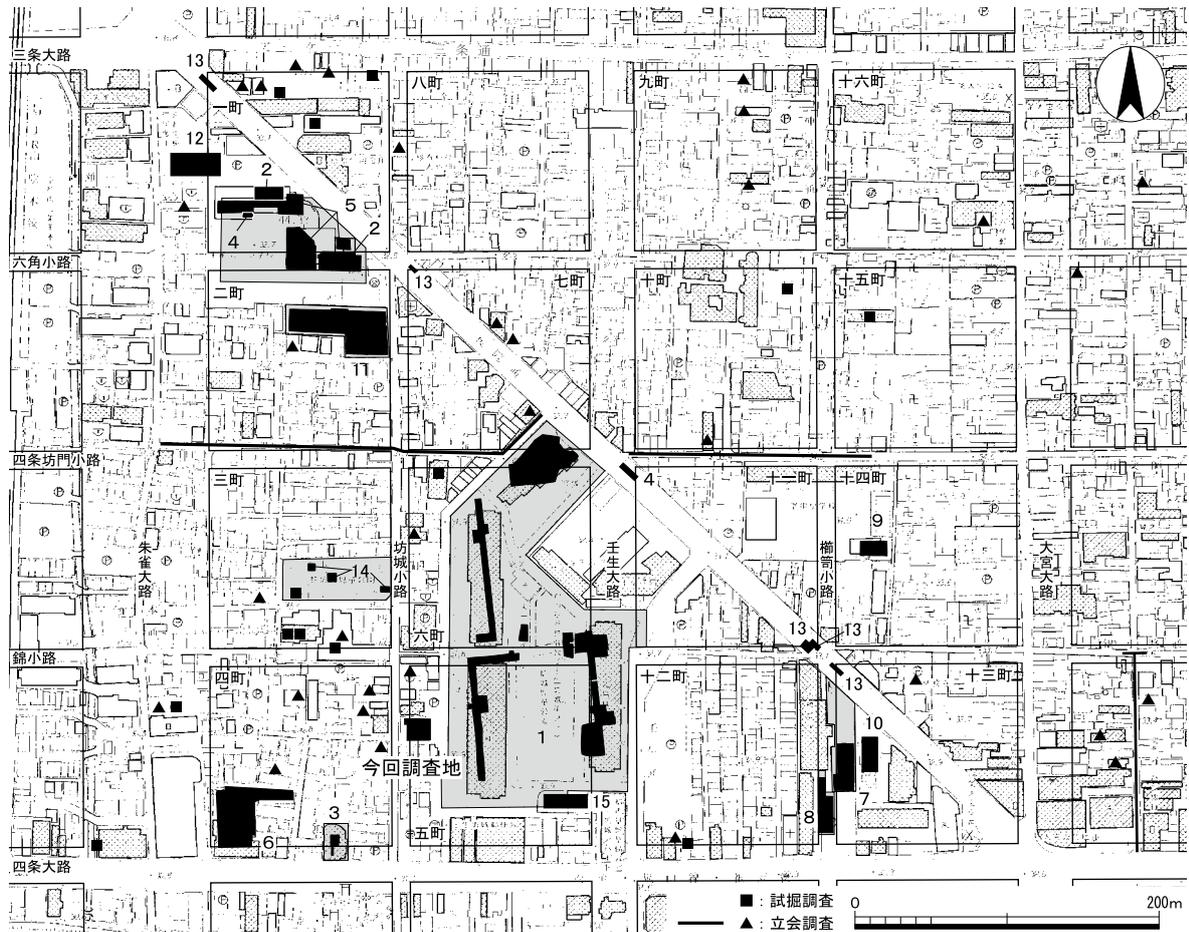


図9 周辺調査位置図（1：5,000）

『日本紀略』)。十二町には12世紀後半に菅原貞衡の邸宅があったが応保元年（1161）に焼失（『山槐記』）、十三町には12世紀後半に中納言藤原家成（『仁和寺所蔵古図』）の邸宅が所在したとされる。

（2）周辺の調査（図9、表1）

平安京左京四条一坊では、これまでも発掘調査がなされている。

平安時代前期の遺構は、二町で掘立柱建物・井戸や溝・土坑（調査11）、四・五・六・十三町で井戸（調査3・10・12・15）を確認している。一町では、園池や井戸を検出しており（調査2・4・5）、池からは「朱雀院」銘の題箋軸が出土している（調査5）。また十三町でも、一部石敷きを施した池を検出している（調査7・8・10）。

平安時代中期の遺構は、二町で井戸・溝（調査11）、三町で建物・溝・土坑（調査14）、五町で井戸（調査1）を確認している。

平安時代後期の遺構は、一・十三町で井戸（調査10・12）、三・四町で柱穴・井戸・溝・土坑（調

表1 周辺調査一覧表

No.	条 坊	方法	調査概要	文 献
1	左京四条一坊 五・六・七町	発掘	平安時代前期の井戸、土坑。平安時代中期の井戸。平安時代後期の掘立柱建物。平安時代～鎌倉時代の四条坊門小路路面・側溝。中世の掘立柱建物。遺物：弥生・古墳時代の土器、平安時代の墨書土器など。	『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』平安京調査会 1975年
2	左京四条一坊一町	発掘	平安時代の池など。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧 1981』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1982年
3	左京四条一坊四町	発掘	平安時代前期の井戸。平安時代後期の溝、井戸、土坑、柱穴。遺物：磁州窯壺片。	「左京四条一坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
4	左京四条一坊一町	発掘	平安時代の池。中世の溝。	「平安京左京四条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
5	左京四条一坊 一・二町	発掘	平安時代前期～中期の六角小路南築地下暗渠・北側溝・北築地内溝、井戸、池など。平安時代後期の六角小路路面・北築地・北側溝・南側溝、井戸、溝、瓦溜など。遺物：「朱雀院」墨書の題箋など。	「平安京左京四条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
6	左京四条一坊四町	発掘	平安時代前期の井戸。平安時代後期の四条大路北側溝、朱雀大路東築地内溝。	『平安京跡（左京四条一坊四町）発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書3 西近畿文化財調査研究所 2001年
7	左京四条一坊 十三町	発掘	平安時代前期～中期の池。平安時代後期の井戸。中世の井戸、溝、土坑など。近世の土坑など。	『平安京左京四条一坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-10（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
8	左京四条一坊 十二・十三町	発掘	平安時代以前の旧流路、火山灰堆積。平安時代前期の湿地状堆積。室町時代後期の土坑、堀、溝など。	『平安京左京四条一坊十二・十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-33（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
9	左京四条一坊 十四町	発掘	鎌倉時代の土坑。室町時代の井戸。近世の井戸、土坑、土取穴。	「平安京左京四条一坊十四町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
10	左京四条一坊 十三町	発掘	平安時代前期の池。平安時代後期の井戸。室町時代の堀。	『平安京左京四条一坊十三町－壬生坊城町の調査－』古代文化調査会 2011年
11	左京四条一坊二町	発掘	平安時代前期の掘立柱建物、溝、水場、井戸、土坑、ピット、落込み。平安時代中期の溝、井戸、柵状遺構。平安時代後期の礎石建物、石組溝、柵、築地、入江、岬、瀬落しなど。	『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-10（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2015年
12	左京四条一坊一町、 朱雀大路	発掘	朱雀大路東側溝。	『平安京左京四条一坊一町－壬生朱雀町の調査－』古代文化調査会 2020年
13	左京四条一坊一・ 七・十一・十三町、 朱雀大路など	発掘	平安時代後期～鎌倉時代の壬生大路東側溝、櫛笥小路東側溝。室町時代の溝、湿地。江戸時代の井戸、溝、土坑、落込み。	『平安京左京四条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-1（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2021年
14	左京四条一坊三町	発掘	平安時代中期の建物、溝、土坑、落込み、整地層。平安時代後期の坊城小路西築地内溝、溝、土坑、柱穴、整地層。	『平安京左京四条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2022-3（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2022年
15	左京四条一坊五町	発掘	平安時代前期の土坑。平安時代中期の井戸。平安時代後期の井戸、土坑。鎌倉時代の壬生大路西築地内溝、柱列。近世の土取穴。	『平安京左京四条一坊五町跡』京都市文化財保護課発掘調査報告2023-1 京都市文化市民局 2024年

査3・14)、五町で井戸・土坑(調査15)、六町で掘立柱建物(調査1)を確認している。二町では、礎石建物と瀬落しや築山状高まりをもつ園池(調査11)を検出している。

鎌倉時代の遺構は、五町で柱列(調査15)、六町で掘立柱建物(調査1)、十四町で土坑(調査9)を確認している。

また道路関連遺構としては、平安時代前期の朱雀大路の側溝(調査12)、六角小路の路面や側溝(調査5)、平安時代前期から鎌倉時代末の四条坊門小路の路面や側溝(調査1)を、平安時代後期の壬生小路・櫛笥小路の側溝(調査4)、四条大路の側溝(調査6)を検出している。

このように調査地周辺では、平安時代前期から条坊道路が整備され、邸宅が営まれていたことがわかる。平安時代中期にやや遺構数が減るものの、後期になると条坊道路が再整備され、遺構数も増えることから、調査地周辺では平安時代後期に再開発が進んだことが、文献史料及び周辺の調査成果により明らかである。

註

- 1) 『拾芥抄』に「四条北壬生西、是忠親王家」とある。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図10、図版4・5)

調査区の基本層序は、調査区西側では上から現代盛土 (厚さ0.5m)、近世整地層 (厚さ0.15m、標高30.15m)、中・近世整地層 (厚さ0.2m、標高29.95m)、平安時代後期の遺構 (厚さ0.3m、標高29.75m)、基盤層 (標高29.45m以下) である。調査区東側では上から現代盛土 (厚さ0.8m)、近世整地層 (厚さ0.2m、標高30.10m)、平安時代後期整地層 (厚さ0.2m、標高29.90m)、平安時代の遺構 (標高29.70m)、基盤層 (標高29.00m以下) である。

今回の調査では、平安時代後期整地層 (図版4 - 第29~34層) 上面を第1面、基盤層直上を第2面とした。Y=-23,316付近から西半は中世に削平を受けていたため、調査区西半 (1区) では基盤層上面で第1面及び第2面の遺構を同時に検出した。調査区西半における中世の削平は、北壁断面では現在0.5mほどの段差として確認できるが、位置はほぼ1・2区の境界と重複しており、段

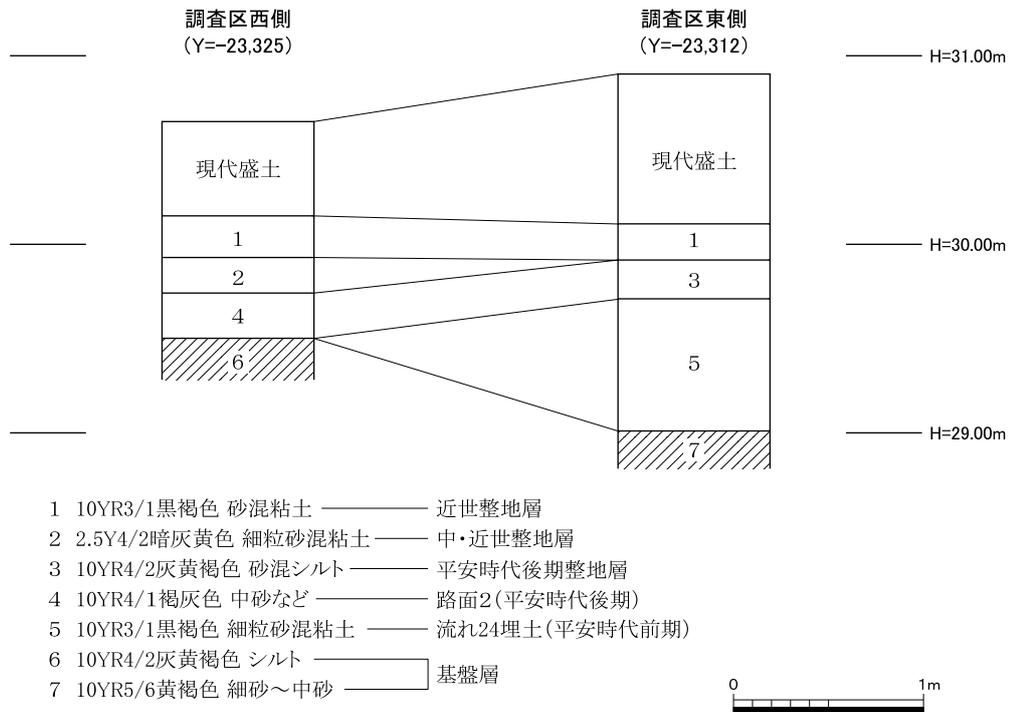


図10 基本層序柱状図 (1 : 40)

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	流れ24	
平安時代後期	柱列1・2、路面2、平坦面14、築地35、溝19・55、井戸64、土坑20・60・79	
鎌倉時代	溝13・61・63	

差を平面的に検出することはできなかった。

第1面では鎌倉時代の溝、平安時代後期の柱列や路面や築地・溝・土坑・井戸を、第2面では平安時代前期の流れを検出した。

(2) 第2面の遺構 (図版1・7)

流れ24 (図版9～11、図11) 調査区東半に広がる湿地状堆積を検出した。南北長15m以上、東西幅10.5m、深さ約0.9mである。流れ24の西辺は直線状にのび、調査区北東隅では基盤層を削り出して上部に盛土をした高さ0.7mの高まりを検出した。この高まりは陸部となっており、東岸の可能性はある。

この北東隅の高まりの斜面では、基盤層の上に灰色～褐灰色砂混粘土と、3～8cmの礫を洲浜状に敷いた状況を確認した。また流れ24の底面である調査区中央南部の一部 (礫敷き81) や、調査区南東隅でも礫敷きが施されていた。

高まり上面には、幅0.4m、長さ1.2m以上の木80が埋置されていた。腐敗のため加工痕跡や用途については不明であるが、流れ24の流れた方向と垂直に置かれていることや、掘形とみられる小土坑 (図版5-26層) も確認していることから、人為的に埋置されたものとみられる。樹種はコナラ属クヌギ節である。

流れは、粘土層 (図版4-35層)、シルト～中砂・砂混粘土層 (図版4-36～38層) の大きく2層に分けて掘削した。下層のシルト～中砂・砂混粘土層 (36～38層) では、水が流れた状況を確認した。底面の標高や周辺の地形により、北から南へ水が流れていたとみられる。下層から遺物はほとんど出土していない。機能時の堆積とみられる。上層の粘土層 (35層) は、水の流れが滞り、泥が溜まった状態とみられる。上層から多量の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・輸入陶磁器、瓦、木製品、金属製品などが出土した。木製品には、漆器皿や木皿・木筒・箸・杓子・斎串・下駄・櫛などがある。金属製品には6種類の皇朝十二銭、銅製の帯金具、石製品には白玉・黒玉、須恵器瓶子に入ったガラス玉がある。貝や種実、骨も出土しており、とくにウシ下顎骨が良好な状態で出土した (図11)。出土した土器類は、2 B段階を中心とした2 A～C段階に位置付けられる。

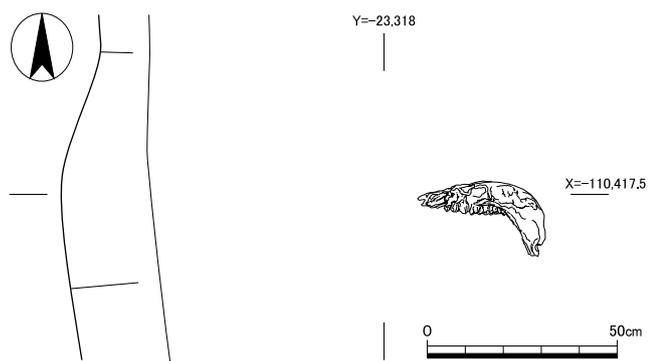


図11 流れ24ウシ下顎骨出土状況図 (1:20)

(3) 第1面の遺構 (図版2・3・8)

平安時代後期の柱列1・2、路面2、平坦面14、築地35、溝19・55、井戸64、土坑20・60・79、柱穴、鎌倉時代の溝13・61・63を検出した。

平安時代後期の遺構（図版2）

柱列1（図版6） 調査区西部で5基の柱穴（柱穴38・45・30・41・40）からなる南北柱列を検出した。柱穴は直径0.3～0.5mの円形もしくは隅丸方形を呈し、深さは0.20～0.35mである。柱間は1.95m。これらの柱穴は溝19の埋土下で検出しており、柱列1の方が溝19よりも古い。埋土から5B段階の土師器が出土した。

柱列2（図版6・12） 調査区南西部で2基の柱穴（柱穴43・48）からなる南北柱列を検出した。柱間は4.1m。2基とも柱材は抜き取られていた。溝13の埋土下で検出しており、柱列2の方が溝13よりも古い。5B段階の土師器が出土した。

北側の柱穴48は、南北1.1m、東西1.3mの長円形を呈し、深さ0.4mである。底面には2枚の礎板を上下に重ねて置いていた。下の礎板は長辺0.5m、短辺0.3mの長方形で、その上に砂礫混シルトを積み、さらに長辺0.4m、短辺0.2mの長方形の礎板を置いていた。礎板の厚さはいずれも約2cmであった。樹種は上段がスギ、下段がヒノキ属である。南側の柱穴43は、南北1.0m、東西0.9mの長円形を呈し、深さ0.5mである。底面には長辺0.5m、短辺0.3mの長方形の礎板を1枚置いていた。礎板は腐食していたため、樹種は不明である。

路面2（図版13） 調査区西端で礫敷きを検出した。調査区北西隅を拡張したところ、この礫敷きが西側に続いていることを確認した。この礫敷きの範囲は南北長15m以上、東西幅2.5m以上である。礫敷きは基盤層の上に暗灰黄色細粒砂混粘土～褐灰色中砂（図版4-21・22層）を約15cm盛り、その上に1～3cmの礫を多量に含んだ褐灰色中砂～にぶい黄褐色粗砂（図版4-19・20層）を約20cm敷き、固く締めていた。Y=-23,321.30付近に坊城小路東築地推定心が位置することから、この礫敷きは坊城小路の路面とみられる。5B段階の土器が出土した。

また路面2の南端では、平安時代前期の須恵器瓶子が横位置で置かれた状態で出土した。

平坦面14 路面2の東側で平坦面を検出した。南北長15m以上、幅1.1m以上で、路面2の東端を掘り込み、礫混土で埋め戻して、平坦面を構築していた。

築地35（図版14） 調査区西側で南北方向の溝状の掘り込みを検出した。南北長15m以上、東西幅1.0～1.5m、深さ0.2mである。土手状に高く掘り残した基盤層の頂部に溝状の掘り込みをし、内部に砂礫を入れて固く締めていた。溝の南半では、東肩に数枚の土師器皿が伏せた状態で南北に置かれた状況を確認した。築地の基礎とみられる。5A段階の土器や、モモ核、ウシ頭蓋骨が出土した。

溝19 築地35の東側で検出した。南北長15m以上、東西幅1.5m、深さ0.2mである。5B段階の土器が出土した。流れ24と重複して存在しているため、平安時代前期の遺物も多量に出土した。

溝55（図版13） 路面2の下層で南北溝を検出した。南北長3.5m以上、東西幅1.6m、深さ0.2mである。5B段階の土器が出土した。

井戸64（図版5・14） 調査区東端中央で井戸とみられる土坑を検出した。南北1.5m、東西0.3m以上、深さ0.7mである。土坑からは径20cmほどの礫が多く出土した。また井戸枠とみられる縦板を2本確認したことから、井戸と判断した。井戸枠の規模は南北1.1m、東西0.3m以上の方形とみら

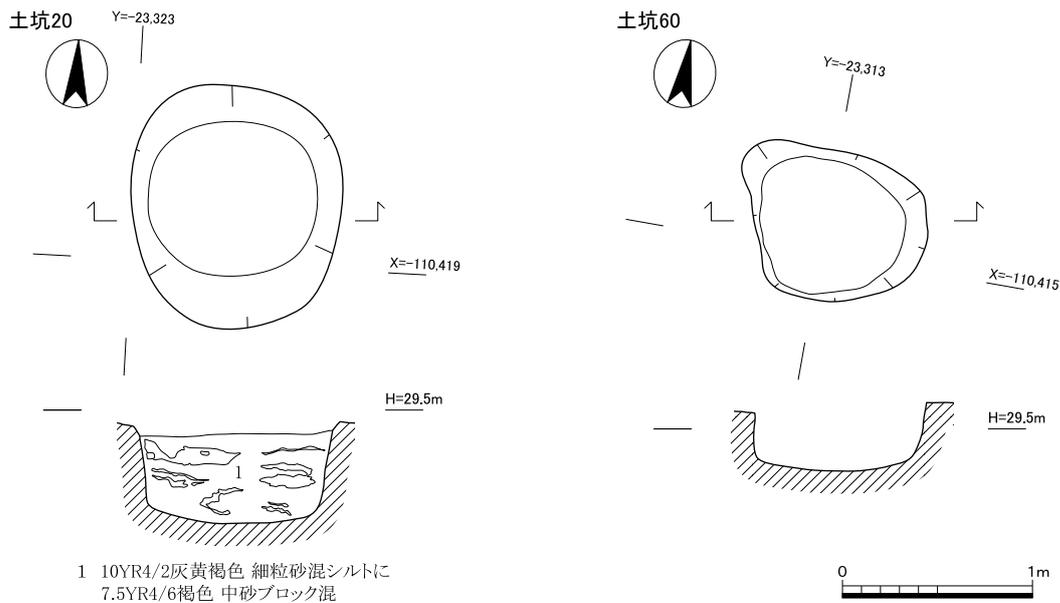


図12 土坑20・60実測図（1：40）

れる。平面精査では井戸の掘形のプランを確認できなかった。平安時代後期の軒丸瓦が出土した。

土坑20（図12、図版14） 調査区南西部で土坑を検出した。南北1.3m、東西1.1mのやや南北に長い円形を呈し、深さは0.5mである。平安時代中期の軒平瓦や4B～5段階の土師器が出土した。

土坑60（図12、図版14） 調査区東側中央で土坑を検出した。長辺0.9m、短辺0.8mの不定形で、深さ0.3mである。埋土は木片を多量に含んだ黒色粘土で、多量の土器類、下駄や将棋駒などの木製品のほか、被熱したマダイの歯骨などの動物遺存体や多量の植物遺存体が出土した。廃棄土坑とみられる。出土した土器類は5B段階に位置付けられる。

土坑79 調査区南東側で東西に長い溝状の土坑を検出した。南北幅0.9m、東西6m以上で、深さ0.5mである。4～5段階の土器やモモ核が出土した。

鎌倉時代の遺構（図版3）

溝13 調査区西部で南北溝を検出した。南北長15m以上、東西幅1.1～1.6m、調査区北端では深さ0.5mほど残存していたが全体の平均的な深さは0.1～0.2mである。路面2の東側溝とみられる。5B段階の土器が出土するが、層位的には中世の遺構とみられる。

溝61 調査区東端で南北溝を検出した。北壁断面でのみ東肩を確認している。南北長15m以上、東西幅1.3m、深さ0.25mである。6B～C段階の土器が出土した。

溝63 調査区東側で南北溝を検出した。南北長15m以上、東西幅約0.5m、深さ0.2～0.3mである。6B段階の土器が出土した。

註

1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物整理用コンテナ67箱分の遺物が出土した。内訳は、土器・瓦類60箱、木製品4箱、金属製品1箱、石製品1箱、骨・貝1箱である。

流れ24から平安時代前期を主とした多量の土器類（土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器）、瓦、皇朝十二銭、漆器や木皿・櫛などの木製品、ウシの下顎骨や種実が出土した。また土坑60から平安時代後期の多量の土師器、将棋駒や下駄などの木製品が出土した。

(2) 土器類（図13～16、図版15～17、付表1）

平安時代前期の土器

流れ24出土土器（図13・14、図版15 1～39） 1～11は土師器。1～6は椀A。5・6はケズリを施す。胎土や調整から大和産とみられる。7・8は杯B。いずれも低い高台がつき、粗いケズリを施す。9・10は高杯。9は杯部で、口縁部は外側に反り、口縁端部は上方にやや突出する。10は脚部で、8面に面取りするとみられる。9とは別個体である。11は壺。体部は球形で、丸底である。

12～16は黒色土器。12・13は杯。12は内面ミガキ、外面ナデを施す。13は内外面ともにミガキを施す。底部・体部内面にらせん状暗文がみられる。14～16は椀。14・15は内面ミガキ、外面ナデを施す。断面三角形の低い高台がつく。16は内外面ともにミガキを施す。体部内面にらせん状暗文がみられる。12～15は内面のみ黒色化したA類、16は内外面ともに黒色化したB類である。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類、木製品、石製品、土製品、金属製品、動植物遺存体		土師器11点、須恵器5点、黒色土器5点、白色土器2点、緑釉陶器12点、灰釉陶器4点、墨書土器6点、軒丸瓦10点、軒平瓦8点、平瓦1点、木製品21点、石製品5点、土製品2点、金属製品10点、動植物遺存体一括		
平安時代後期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、土製品、金属製品、動植物遺存体		土師器40点、山茶椀1点、緑釉陶器1点、輸入陶磁器3点、墨書土器2点、軒丸瓦9点、軒平瓦9点、木製品14点、石製品4点、土製品2点、金属製品1点、動植物遺存体一括		
鎌倉時代	土師器		土師器1点		
合計		86箱	189点（17箱）	2箱	67箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より19箱多くなっている。

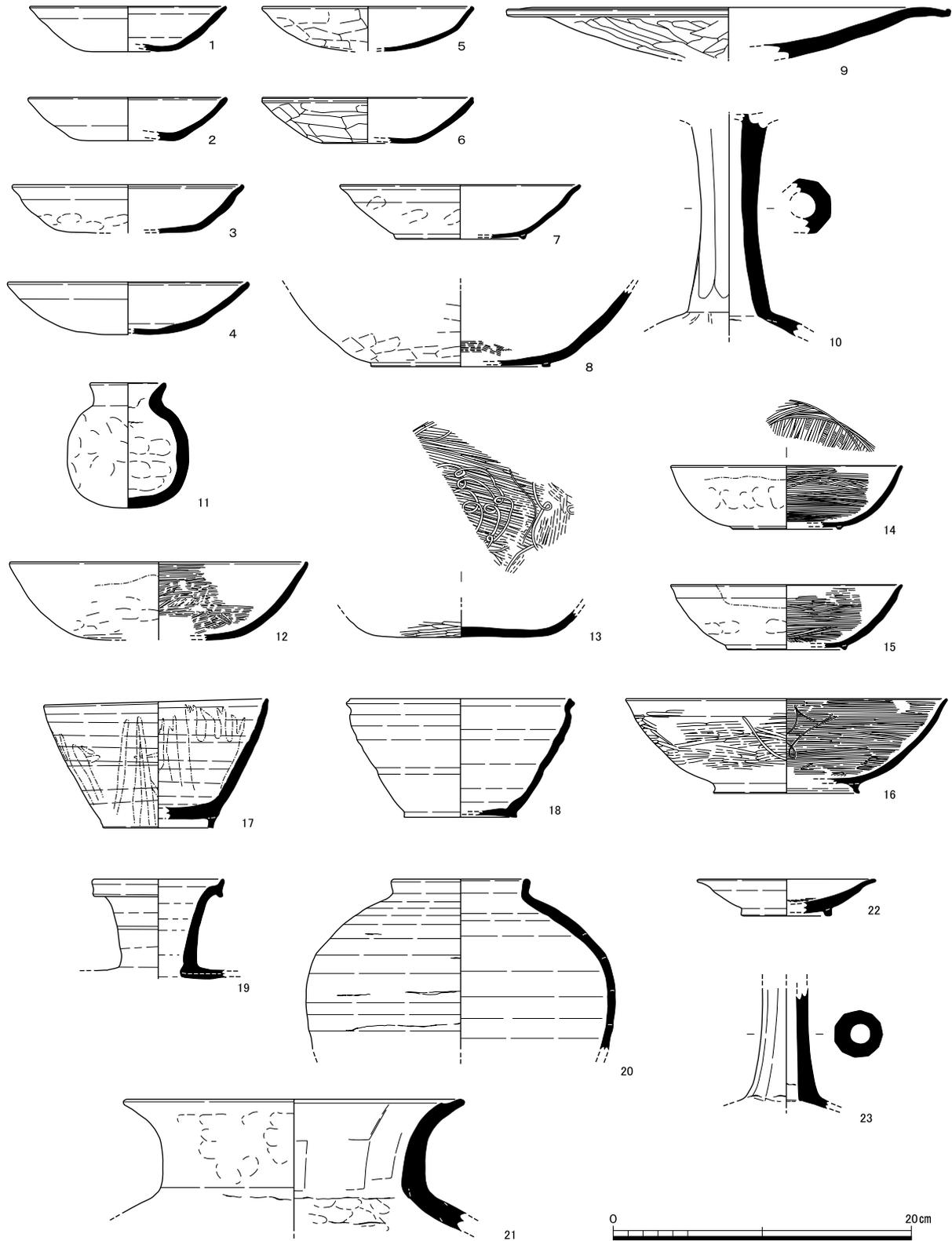


図13 流れ24出土土器実測図1 (1:4)

17～21は須恵器。17は高台のつく杯B。口縁部はやや内弯する。内外面に火樫の痕跡が確認できる。18は鉢。口縁部が外側に「く」の字に屈曲する鉢B。底部は糸切り痕跡が確認できる。19は長頸壺。頸部から口縁部にかけて残存する。20は短頸壺。体部から口縁部にかけて残存する。肩部

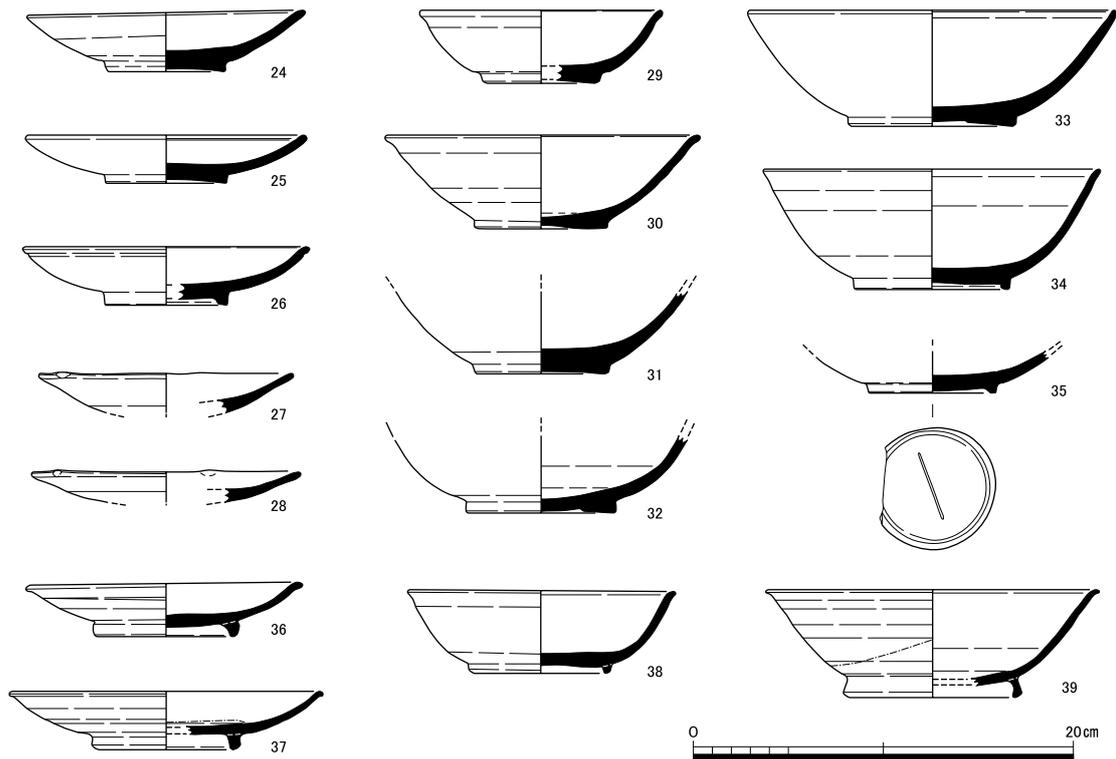


図14 流れ24出土土器実測図2 (1:4)

外面から口縁部外面にかけて自然釉が付着する。肩部が最大径となり、下方はすぼまる。21は甕の口縁部。

22・23は白色土器。22は皿。口縁部が大きく外反する。23は高杯の脚部で、12面に面取りする。外面は白色で、焼成はやや硬質である。外面に全体的に煤が付着する。

24～35は緑釉陶器。24～28は皿。24・25は削り出し平高台。ともに焼成は軟質。いずれも形態や胎土、釉調から京都産とみられる。26は細く高台を削り出す。27・28は口縁部をおさえ輪花状にする。猿投産。29～35は椀。29～31は削り出し平高台。29の焼成は軟質。32・33は削り出し蛇の目高台。33の口縁端部はやや内弯する。34・35は細く高台を削り出す。35は底部外面に直線状の線刻が確認できる。いずれも形態や胎土、釉調から京都産とみられる。

36～39は灰釉陶器。36・37は皿。36は体部内面を施釉し、外面と底部内面は露胎のままである。37は体部内外面のみ刷毛により施釉し、底部内外面は露胎のままである。底部内面は非常に滑らかで墨痕が残存することから、硯に転用したものとみられる。38・39は椀。38は内面を施釉する。39は体部内面から腰部外面まで刷毛により施釉し、底部内面は露胎のままである。底部内面にトチンの痕跡がみられる。猿投産。

流れ24出土の土器群は2B段階（9世紀後半）を中心とし、2A～C段階（9世紀中頃から10世紀前半）がみられる。

平安時代後期の土器

柱列1出土土器（図15、図版16 40・41） 40は柱穴38、41は柱穴40から出土した。40・41は土師器皿N。いずれも口縁部は2段ナデを施し、端部は三角形を呈する。土器の時期は5B段階

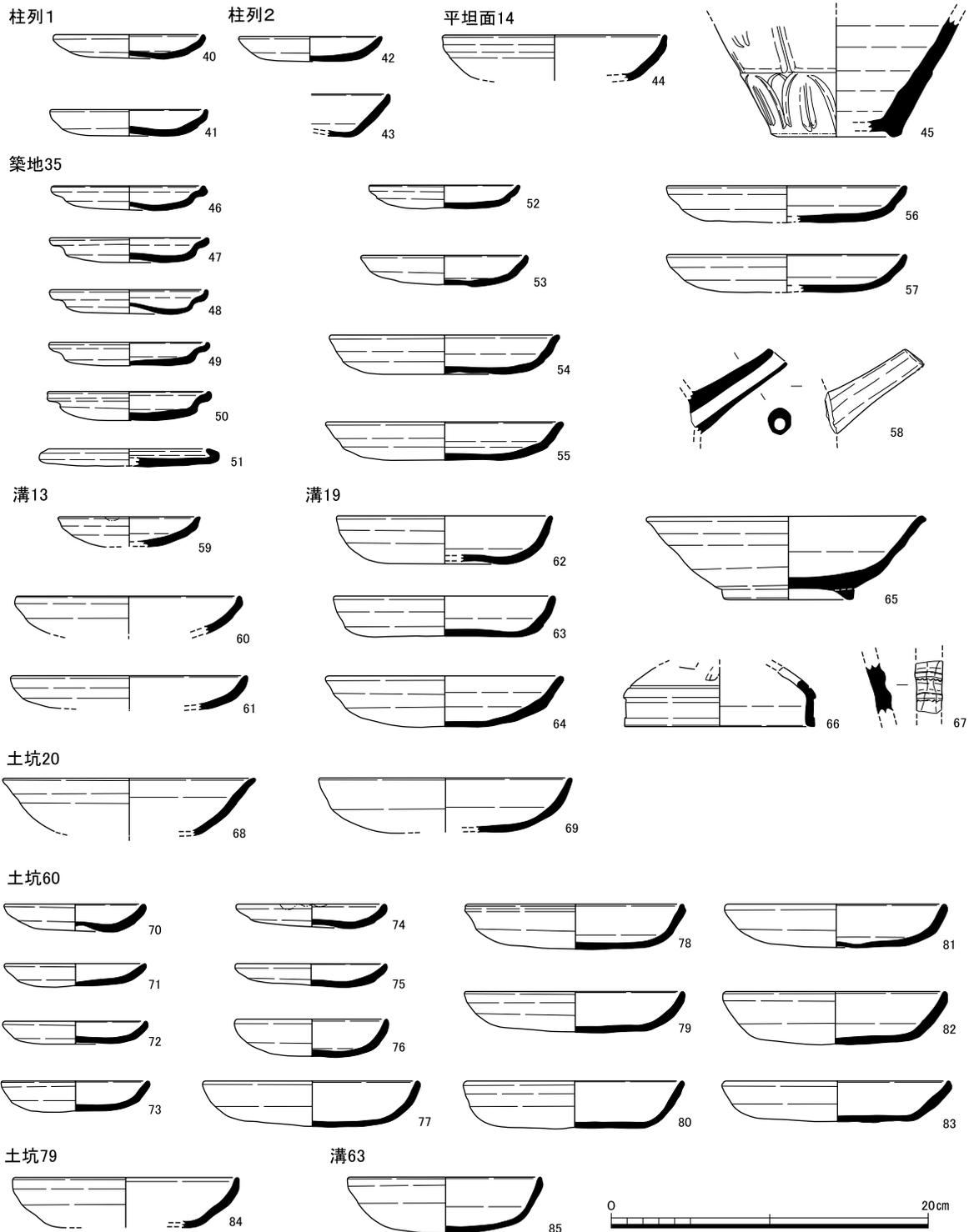


図15 第1面の遺構出土土器実測図（1：4）

で、12世紀後半に属する。

柱列2出土土器（図15 42・43）42は柱穴43、43は柱穴48から出土した。42・43は土師器皿N。口縁部は2段ナデを施し、端部は三角形を呈する。土器の時期は5 B段階で、12世紀後半に属する。

平坦面14出土土器（図15、図版16 44・45）44は土師器皿N。口縁部は2段ナデを施す。土

器の時期は5 B段階で、12世紀後半に属する。45は白磁。梅瓶の胴部裾から底部が残存する。最下段に花卉文様を陰刻する。

築地35出土土器（図15、図版16 46～58） 46～57は土師器。46～50は皿A。口縁端部はいずれも上方に突出させる。46・47・50は器壁や口縁部が肥厚する。46～48は底部中央がやや上げ底となる。51は皿Ac。いわゆるコースター形の皿で、口縁端部を内側に折り曲げる。52～57は皿N。52・54～57は明瞭に2段ナデを施す。54・55は口縁端部がやや外反する。58は緑釉陶器。水注の注口部。美濃窯産か。群馬県山王廃寺で完形品が出土する。土器の時期は4 C～5 A段階で、11世紀末から12世紀前半に属する。

溝13出土土器（図15 59～61） 59～61は土師器皿N。口縁部は2段ナデを施し、端部は三角形を呈する。土器の時期は5 B段階で、12世紀後半に属する。

溝19出土土器（図15、図版16 62～67） 62～64は土師器皿N。口縁部は2段ナデを施す。65は山茶碗。体部内面を刷毛により施釉し、底部内面と外面は露胎のままである。尾張産とみられる。66は青磁香炉。香炉の蓋で、形状は不明だが透かしが入る。越州窯。越州窯の操業年代の下限が9世紀後半であり、下層の遺構である流れ24の遺物である可能性もある。67は白磁。水注の把手とみられる。内面は平坦、外面に竹節状の突帯がつく。土器の時期は5 B段階で、12世紀後半に属する。

土坑20出土土器（図15、図版17 68・69） 68・69は土師器皿N。68は口縁部は2段ナデを施し、端部がやや外反する。69は内外面ともに煤が全体的に付着する。土器の時期は4 B～5段階で、11世紀中頃から12世紀初頭に属する。

土坑60出土土器（図15、図版17 70～83） 70～83は土師器皿N。大きさは口径8.7～9.4cmの70～76、口径13.5～14.0cmの77～83がある。70・71は底部中央がやや上げ底となる。78・83は口縁端部は三角形を呈する。81は口縁部、内面に煤が付着する。土器の時期は5 B段階で、12世紀後半に属する。

土坑79出土土器（図15 84） 84は土師器皿N。口縁部は明瞭な2段ナデを施す。土器の時期は5 A段階で、12世紀前半に属する。

鎌倉時代の土器

溝63出土土器（図15、図版17 85） 85は土師器皿N。口縁端部は上方に突出する。溝63出土遺物には、小片であるが皿Sも確認できることから、6 B段階（13世紀前半）とみられる。

墨書土器（図16、図版17）

墨書土器が8点出土した（墨1～8）。墨1は須恵器杯A底部、墨2～8は須恵器杯Bの底部。いずれも底部外面に墨書がみられる。底部の一部しか残存しておらず、文字は不明なものが多いが、墨2は底部中央に「忠」と記される。墨1～6は流れ24、墨7は溝19、墨8は溝55から出土した。

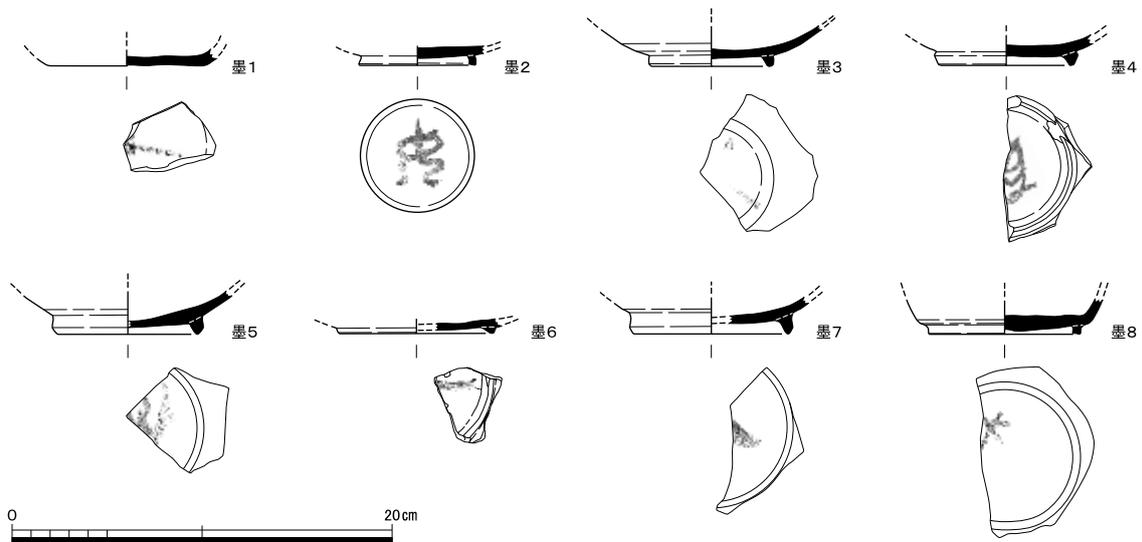


図16 墨書土器実測図（1：4）

（3）瓦類（図17～19、図版18）

軒丸瓦（図17、図版18 瓦1～19） 瓦1は複弁八弁蓮華文。中房に蓮子1+6が配される。外区に珠点と鋸歯文がめぐる。平城宮式6282G型式。流れ24から出土した。

瓦2は単弁蓮華文。蓮華文の摩耗が激しい。周縁には珠点がめぐる。珠点の外側には界線がある。瓦当面に朱が付着する。長岡宮式7193Ac型式か。流れ24から出土した。

瓦3は複弁六弁蓮華文。複弁の間にみられるのぞきの間弁も複弁である。中房の蓮子は1+5。周縁に珠点がめぐる。平安時代前期。流れ24から出土した。

瓦4は複弁蓮華文。蓮華文と珠点の間に二重界線がある。胎土には砂粒を多く含む。平安時代前期。流れ24から出土した。

瓦5は複弁蓮華文。流れ24から出土した。

瓦6は複弁四弁蓮華文。バチ形の間弁がある。外区はひろく、珠点がめぐる。平安時代中期。平安時代後期整地層から出土した。

瓦7は単弁蓮華文。バチ形の間弁がある。外区に広い間隔で珠点がめぐる。平安時代中期。築地35から出土した。

瓦8は複弁四弁蓮華文。バチ形の間弁がある文様とみられる。平安時代中期。平安時代後期整地層から出土した。

瓦9は単弁蓮華文。単弁の間にのぞきの間弁がある。周縁は狭く、珠点をめぐらせる。一本造りの技法がみられる。平安時代中期。平安時代後期整地層から出土した。

瓦10は複弁七弁蓮華文。間弁は独立する。外区に珠点がめぐる。〔円勝寺2015〕の瓦16、〔尊勝寺1961〕の55と同文。山城産。平安時代後期。溝19から出土した。

瓦11は複弁蓮華文。間弁は独立する。外区に珠文がめぐる。胎土に砂粒をよく含む。山城産。平安時代後期。平安時代後期整地層から出土した。

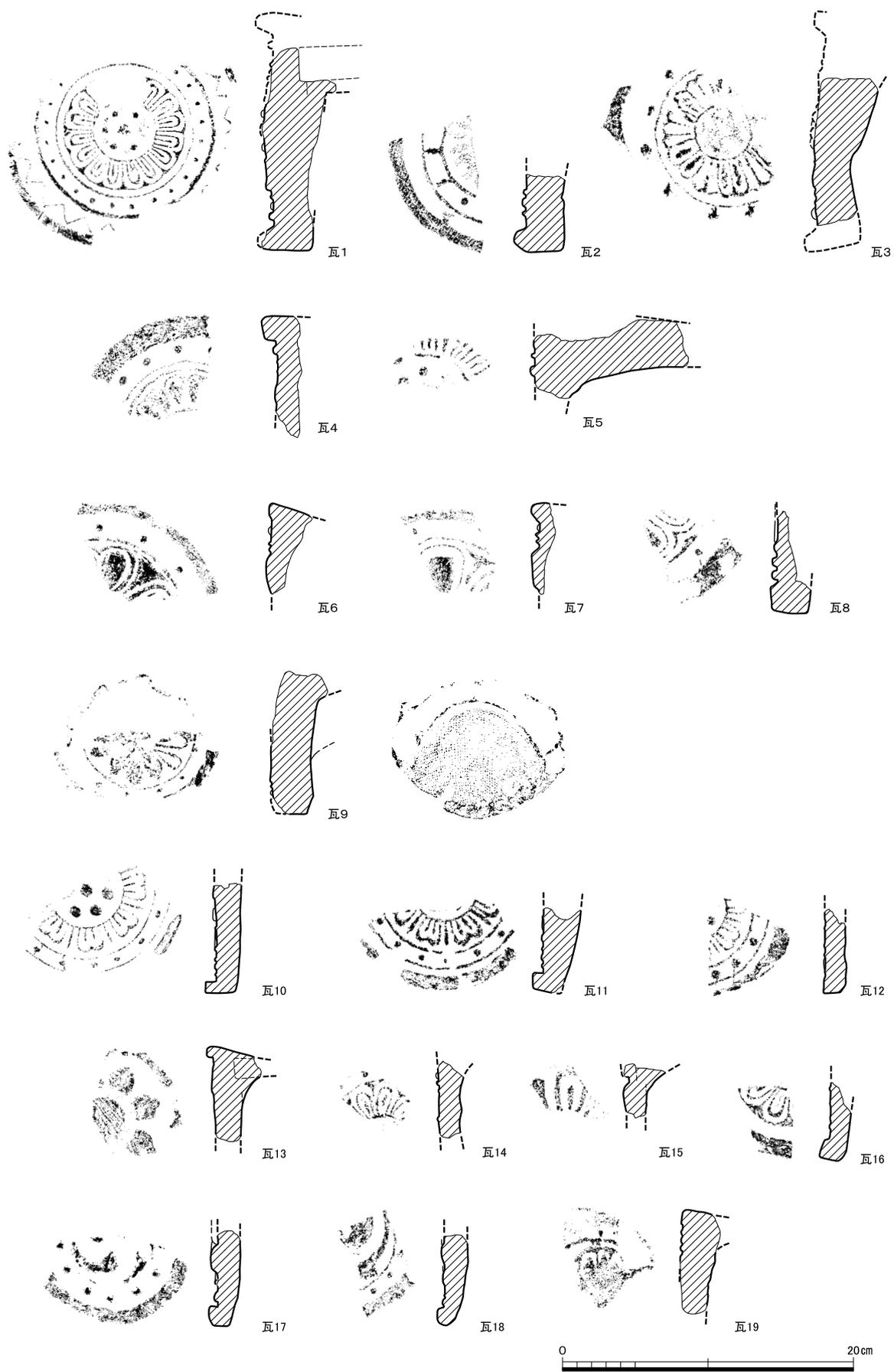


图17 軒丸瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

瓦12は複弁蓮華文。間弁は独立する。外区に珠点がめぐる。平安時代後期か。平安時代後期整地層から出土した。

瓦13は単弁蓮華文。摩滅が激しい。〔円勝寺2016〕の瓦37、〔鳥羽離宮田中殿1975〕の図6-3と同文。平安時代後期。溝13から出土した。

瓦14は単弁十弁蓮華文。〔尊勝寺1987〕の図6-2、〔円勝寺2015〕の瓦21、〔円勝寺1972〕のER038型式と同文。山城産。平安時代後期。溝19から出土した。

瓦15は単弁蓮華文。花卉よりも高い間弁をもつ。〔円勝寺2017〕の瓦26と同文。山城産。平安時代後期。平安時代後期整地層から出土した。

瓦16は単弁蓮華文。円勝寺ER23型式と同文。平安時代後期。平安時代後期整地層から出土した。

瓦17は巴文。左巻き。外区に珠点がめぐる。平安時代後期。中世整地層から出土した。

瓦18は巴文。右巻き。外区に小さい珠点がめぐる。平安時代後期。溝61から出土した。

瓦19は蓮華文。摩滅が激しい。界線と珠点がみられる。山城産。時期不明。流れ24から出土した。

軒平瓦（図18、図版18 瓦20～36） 瓦20は外行唐草文。流れ24から出土した。

瓦21は唐草文。外区は界線、珠点がめぐる。平城宮6721型式。流れ24から出土した。

瓦22は外行唐草文。中心文は3葉とみられる。西賀茂瓦窯。平安時代前期。流れ24から出土した。

瓦23は外行唐草文。外区は界線、珠点がめぐる。NS206B形式。〔木村1996〕のNo.749と同範。西賀茂瓦窯。平安時代前期。溝63から出土した。

瓦24は外行唐草文。外区は界線、珠点がめぐる。西賀茂瓦窯。平安時代前期。流れ24から出土した。

瓦25は外行唐草文。外区は界線、珠点がめぐる。NS206もしくはNS207型式とみられる。平安時代前期。流れ24から出土した。

瓦26は外行唐草文。中心文は対向C字。河上瓦窯。平安時代中期。井戸64から出土した。

瓦27は唐草文。外区は界線、珠点がめぐる。摩滅が激しい。平安時代中期か。平安時代後期整地層から出土した。

瓦28は内行唐草文。外区は界線、珠点がめぐる。山城産か。平安時代後期。土坑20から出土した。

瓦29は右偏行唐草文。〔法勝寺1975〕の18-1と同文。平安時代後期。平安時代後期整地層から出土した。

瓦30は右偏行唐草文。瓦29と同文か。平安時代後期。土坑79から出土した。

瓦31は唐草文。半裁花文。山城産。平安時代後期。試掘坑から出土した。

瓦32は内行唐草文。外区は界線、珠点、圏線がめぐる。範を複数回押しており、文様が一部不明瞭である。〔円勝寺2016〕の瓦139と同文。平安時代後期。中世整地層から出土した。

瓦33は唐草文。外区に界線。平安時代後期。中世整地層から出土した。

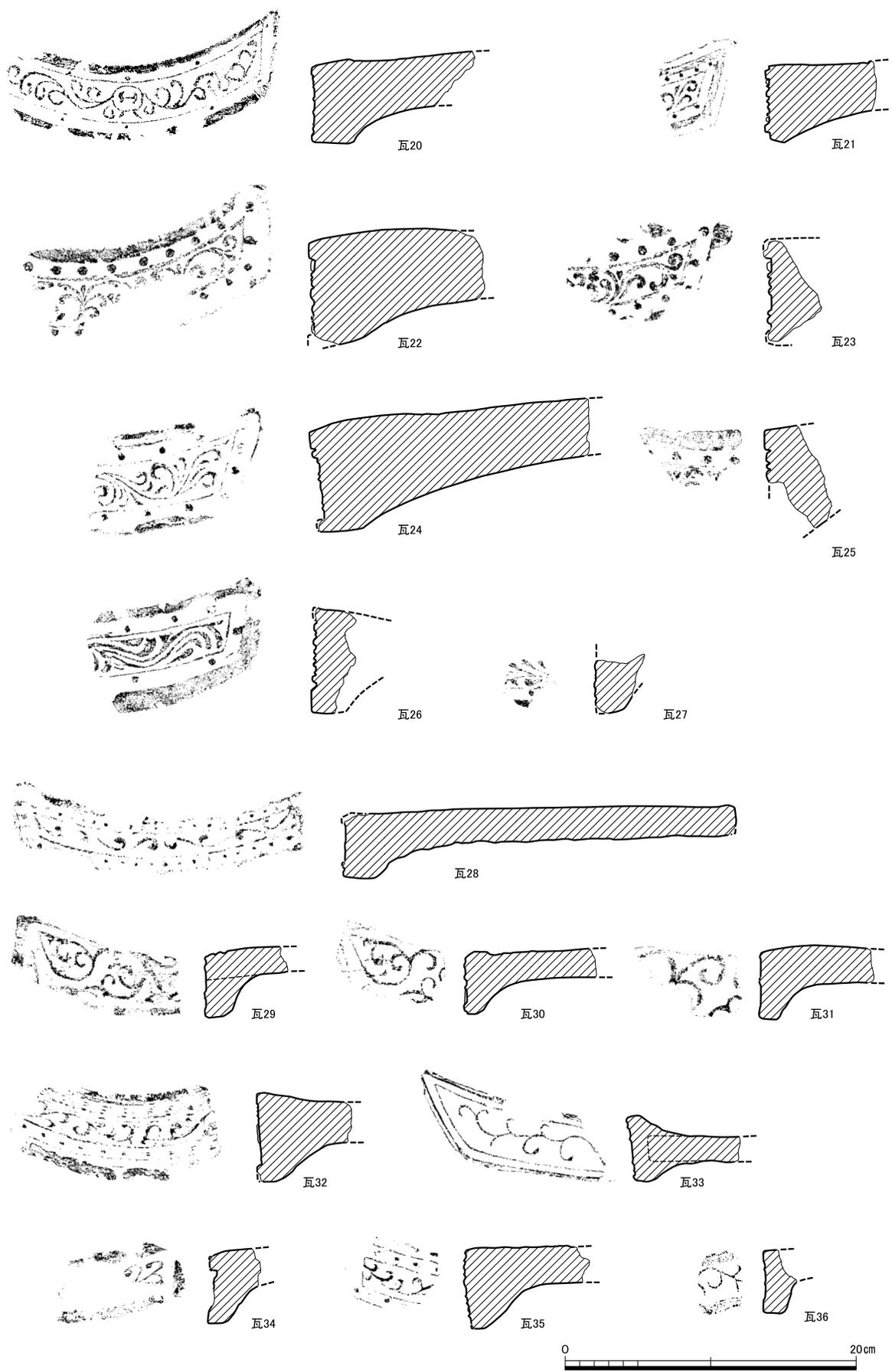


図18 軒平瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

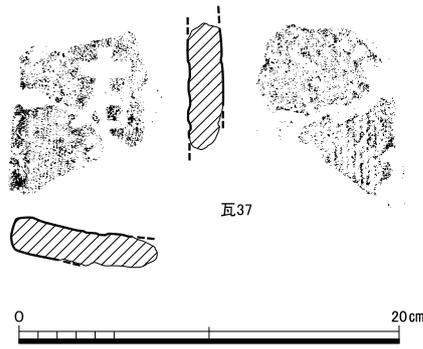


図19 平瓦拓影及び実測図（1：4）

瓦34は外行唐草文。唐草文の先端が丸くなる。半折り曲げ技法。南庄田瓦窯。平安時代後期。中世整地層から出土した。

瓦35は内行唐草文。外区は界線、珠点、圏線がめぐる。平瓦部両面に布目痕跡が残る。胎土に砂粒を多く含む。〔平安京左京四条一坊2001〕のNo.49と同文。平安時代後期。中世整地層から出土した。

瓦36は唐草文の小片。時期不明。中世整地層から出土した。

平瓦（図19、図版18 瓦37）凹面に「右」の押印がある。池田瓦窯。平安時代中期。土坑60から出土した。

瓦類引用文献

〔円勝寺1972〕：円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（下）」『佛教藝術84号』毎日新聞社 1972年

〔円勝寺2015〕：小檜山一良・近藤奈央・伊藤 潔・上村和直・李 銀眞『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年

〔円勝寺2016〕：近藤奈央・上村和直・松吉祐希『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

〔円勝寺2017〕：柏田有香・李 銀眞・上村和直『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年

〔木村1996〕：『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

〔尊勝寺1961〕：「尊勝寺跡発掘調査報告-京都会館建設地の調査-」『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 奈良国立文化財研究所学報第十冊』奈良国立文化財研究所 1961年

〔尊勝寺1987〕：梶川敏夫「尊勝寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

〔鳥羽離宮田中殿1975〕：杉山信三・長宗繁一「鳥羽離宮跡第14次発掘調査概要-田中殿第2次発掘調査-」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-IV』京都市文化観光局文化財保護課 1975年

〔平安京左京四条一坊2001〕：『平安京跡（左京四条一坊四町）発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書第3集 西近畿文化財調査研究所 2001年

〔法勝寺1975〕：上原真人・木村捷三郎・畑 美樹徳「京都市動物園爬虫類館建設に伴う“法勝寺”発掘調査報告」『法勝寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-II』京都市文化観光局文化財保護課 1975年

(4) 木製品 (図20・21、図版19)

木1～4は櫛。いずれも挽歯式。木1は長さ3.6cm、残存幅6.3cm、棟部の厚さ0.8cm。肩が張り、平面形は長方形を呈す¹⁾。1cmあたり12本の歯を挽き出す。木2は長さ4.0cm、残存幅2.9cm。棟部の側面が欠損する。木3は棟部のみ残存する。棟部は中央に向かってやや高く、弧状となる。1cmあたり12本の歯を挽き出す。木4は棟部は直線的だが、肩がやや丸みを帯びる。棟部と親歯の一部が残存しており、櫛歯は欠損している。木1～3は流れ24、木4は溝19から出土した。樹種はいずれもイスノキ。

木5・6は連歯下駄。木5は残存長22.3cm、残存幅8.5cm。小判形を呈す。木6は長さ18.2cm、幅10.4cm。完形品である。小判形を呈す。後壺(穴)に木材が残存する。木5・6ともに都城系下駄様式の主流形式の一つである皿形式²⁾。木5は溝19、木6は土坑60から出土した。樹種は木5がヒノキ、木6は本体がヒノキ属、足甲部の鼻緒2孔に貫入する木がモミ属。

木7は板草履の芯。長さ21.0cm、復元幅9.6cm、厚さ0.3cm。先端に2つの穴を穿ち、両側面を方形に切り欠く。流れ24から出土した。樹種はスギ。

木8は木皿。口径20.3cm、器高1.6cm、底径17.0cm。挽物で、裏面に約1cmの製作時のろくろのツメ痕跡を確認した³⁾。内湾する低い口縁部を挽き出す。流れ24から出土した。樹種はヒノキ。

木9は漆器皿。口径18.4cm、器高1.8cm、底径11.3cm。底部には低い高台がつき、口縁部は大きく外反するなど、施釉陶器の形状と類似する。内外面ともに黒漆をかける。流れ24から出土した。樹種はムクロジ。

木10は曲物底板。長さ14.8cm、幅14.6cm、厚さ0.8cm。側面に4つの釘穴が穿たれる。表面に約9.5cmの刻線痕跡が確認でき、側板を接合する際の目印とみられる³⁾。流れ24から出土した。樹種はヒノキ。

木11は篋杓子。幅2.0cm、厚さ0.9cmの柄に幅5.1cm、厚さ0.7cmの幅広く平坦な身がつく。流れ24から出土した。樹種はスギ。

木12は箸。先端部が折れているが、完形品である。長さ22.2cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm。上端・下端ともに細く削る。土坑60から出土した。樹種はモミ属。

木13～15は斎串。木13は復元長20.4cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm、上部中央と上部右側面が一部欠損する。上端は圭頭状で、上部側面に切り込みが入る。木14は残存長8.0cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm、上半のみ残存する。上端は圭頭状で、上部側面に切り込みが入る。木15は長さ15.6cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、上部右側面が一部欠損する。上端は圭頭状で、上部側面に切り込みが入る。木13～15は流れ24から出土した。樹種はいずれもヒノキ。

木16～18は将棋駒。木16は「王将」。裏面に墨書の痕跡はない。長さ2.8cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm。木17は「金将」。裏面に墨書の痕跡はない。長さ2.8cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm。木18は「歩」。裏面は「と」。長さ2.9cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。いずれも形状は上端の幅がやや狭くなり、寸法は誤差±0.1cmでほぼ同じことから、セットとみられる。木16～18は土坑60から出土した。樹種はい

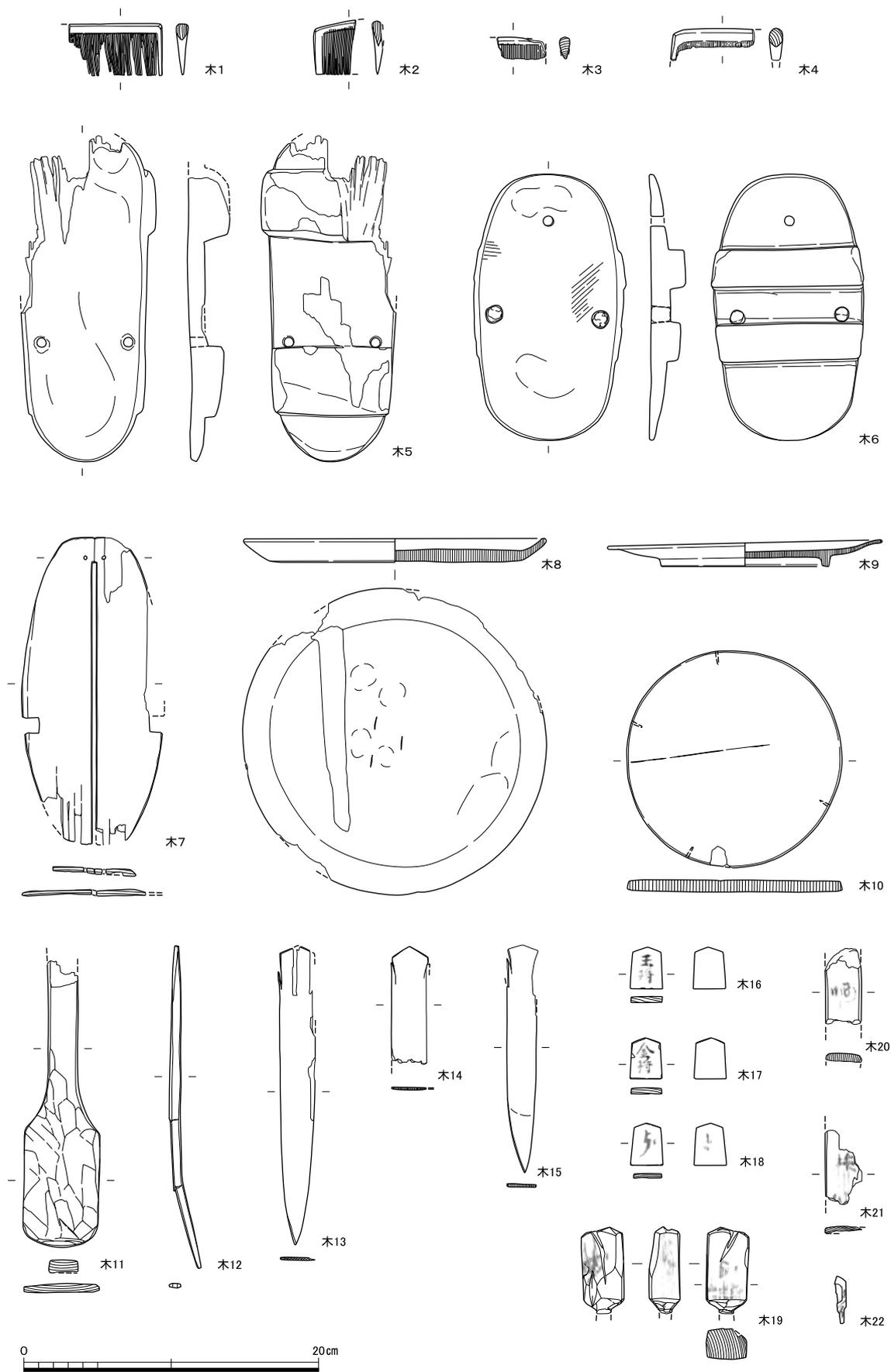


图20 木製品実測图1 (1 : 4)

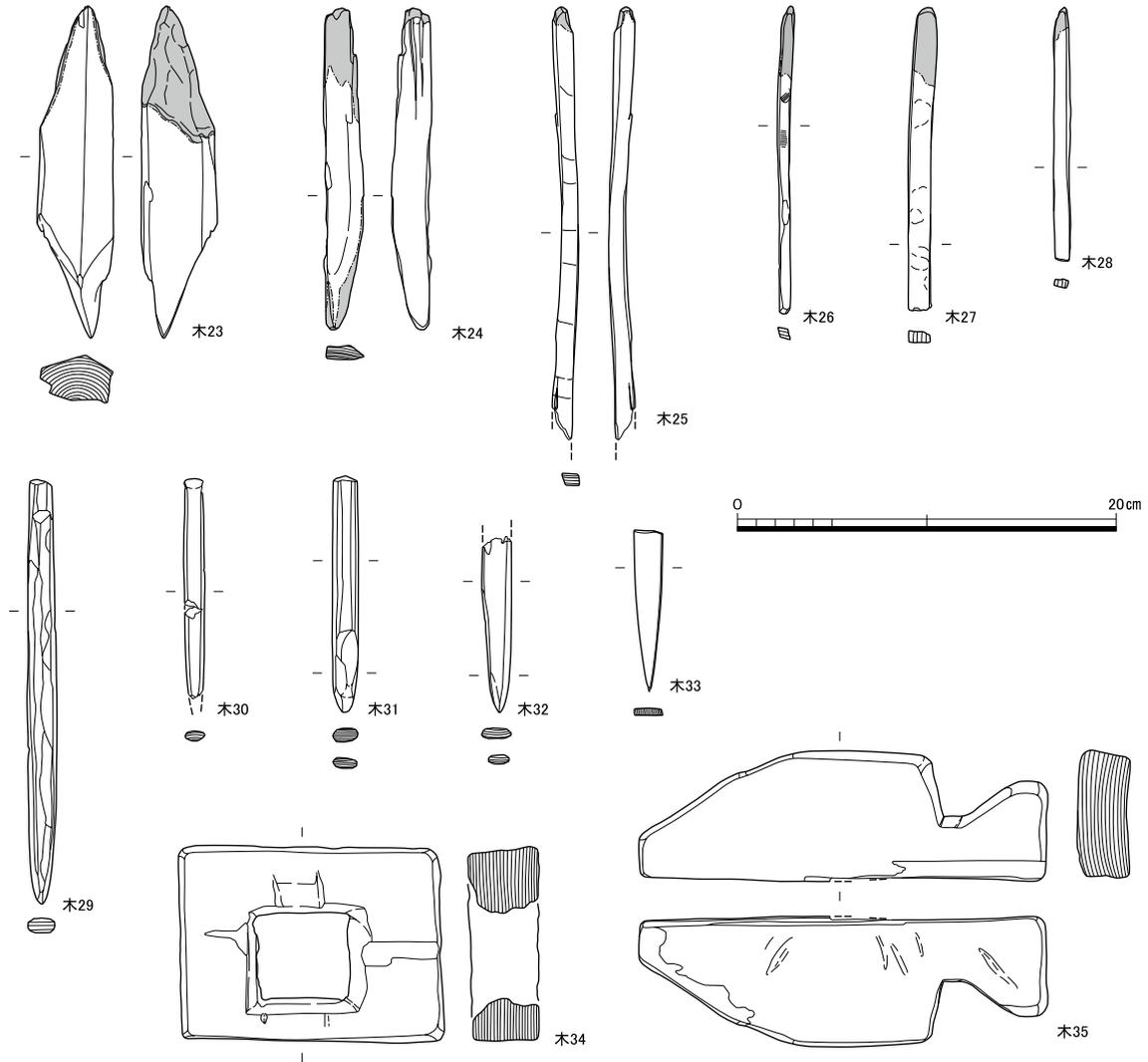


図21 木製品実測図2 (1 : 4)

ずれもスギ。

木19～22は木簡。木19は題箋軸か。文字は判読不明だが、表裏面・側面に墨書がみられる。長さ5.8cm、幅2.9cm、厚さ2.1cmの表題部に、幅1.0cm、厚さ0.8cmの軸部がつく。これまで発掘調査で出土している題箋軸と比較して、表題部が非常に厚い。木20は残存長5.2cm、幅2.5cmの木板片表面に、文字は判読不明だが1文字分の墨書がみられる。木21は残存長5.1cm、残存幅2.5cmの木板片表面に、文字は判読不明だが2文字分の墨書がみられる。木22は木簡の削りくず。文字は判読不明だが、墨書がみられる。木19～21は流れ24、木22は土坑60から出土した。樹種はいずれもヒノキ。

木23～28は付け木。木24のみ両端が炭化する。木23～25は流れ24、木26～28は土坑60から出土した。樹種は木23がヒノキ、木24・25がヒノキ科、木26～28がモミ属。

木29～35は不明製品。木29～33は下端をやや細く削るへら状もしくは棒状木製品。木29は長さ22.6cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm。木30は先端部を欠いており、残存長11.7cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm。木31は長さ12.6cm、幅1.4cm、厚さ0.8cm。木32は下半のみ残存しており、残存長9.4cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm。木33は長さ8.6cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。木29～32は土坑60、木33は流れ24から出

土した。樹種は木29・31がスギ、木30がヤナギ属、木32がコウヤマキ、木33がヒノキ。

木34は長さ14.0cm、幅10.5cm、厚さ3.8cmの長方形を呈した木材の中心に長さ5.0cm、幅4.5cmの方形の穴があく。木材運搬用の縄かけ穴である鼻線りを切り離した際の破材³⁾か。木35は長さ21.6cm、幅7.0cm、厚さ2.8cm。木34・35は流れ24から出土した。樹種はいずれもスギ。

(5) 石製品 (図22～25、図版20)

石製の玉5点と石鍋1点、ガラス玉3点が出土した。

石1は白玉。長さ1.3cm、幅1.0cm、厚さ0.7cm。重さ1.3g。石2は黒玉。長さ1.34cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm。重さ1.4g。石1・2は流れ24から出土した。

石3は白玉。長さ1.4cm、幅1.0cm、厚さ0.65cm。重さ1.2g。溝19から出土した。

石4は白玉。長さ1.25cm、幅1.15cm、厚さ0.5cm。重さ1.1g。石5は白玉。長さ1.6cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm。重さ2.2g。石4・5は築地35から出土した。

石6は石鍋。縦長の長方形の把手がつく。滑石製。直線状に切断されており、温石として転用したとみられる。外面は煤が付着する。溝19から出土した。

石7～9はガラス玉。遺存状態は非常に悪く、凶化することはできなかった。最も残存状況の良

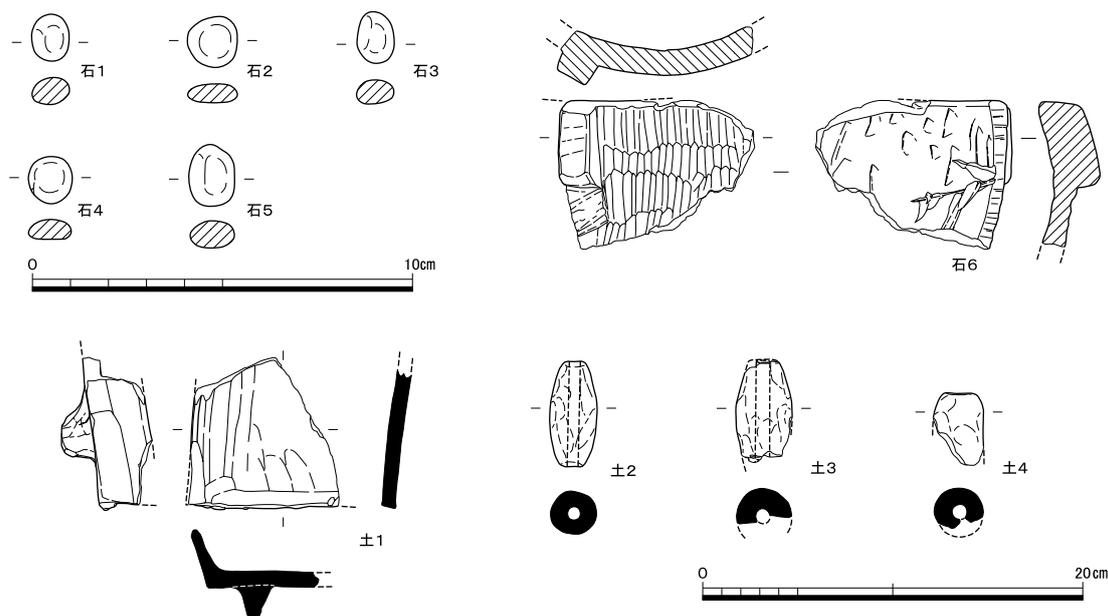


図22 石製品・土製品実測図 (石1～5は1:2、他は1:4)



図23 ガラス玉 (石7)



図24 ガラス玉 (石8)



図25 ガラス玉 (石9)

好な石7の直径は0.5cmで、中央に0.2cmの穴があいていた。これらのガラス玉は須恵器瓶子の中に埋土と共に入っていた。蛍光X線分析から鉛を含むガラス玉であることがわかった。⁴⁾流れ24から出土した。

(6) 土製品 (図22、図版20)

土1は須恵器風字硯。扁平な板状の脚がつく。外堤は折り曲げて成形する。中世整地層から出土した。

土2～4は土錘。土2は完形で長さ5.6cm、幅2.5cm、厚さ2.3cmである。土3は残存長5.4cm、幅3.0cmである。土4は残存長3.8cm、残存幅2.7cmである。土2・3は流れ24、土4は平坦面14から出土した。

(7) 金属製品 (図26、図版20)

銭貨9点、帯金具1点、飾釘1点や鉄滓が出土した。

金1は和同開珎。初鑄は和銅元年(708)。金2は隆平永寶。初鑄は延暦15年(796)。金3・4は富寿神寶。初鑄は弘仁9年(818)。金5・6は承和昌寶。初鑄は承和2年(835)。金7は貞観永寶。初鑄は貞観12年(870)。金8は寛平大寶。初鑄は寛平2年(890)。金1～8は流れ24から出土した。

金9は宣和通寶。1119年から鑄造された北宋銭である。平坦面14から出土した。

金10は銅製の丸軛。長さ3.2cm、幅2.4cm。上辺部のみ丸みを帯びた山形を呈する。裏面には上方中央と下辺2箇所を鋳出す。両面には黒漆が残存する。流れ24から出土した。

金11は鉄製の飾り釘。長さ2.0cm、頭部幅0.9cm。頭部は花卉状になるように刻線が入る。流れ24から出土した。

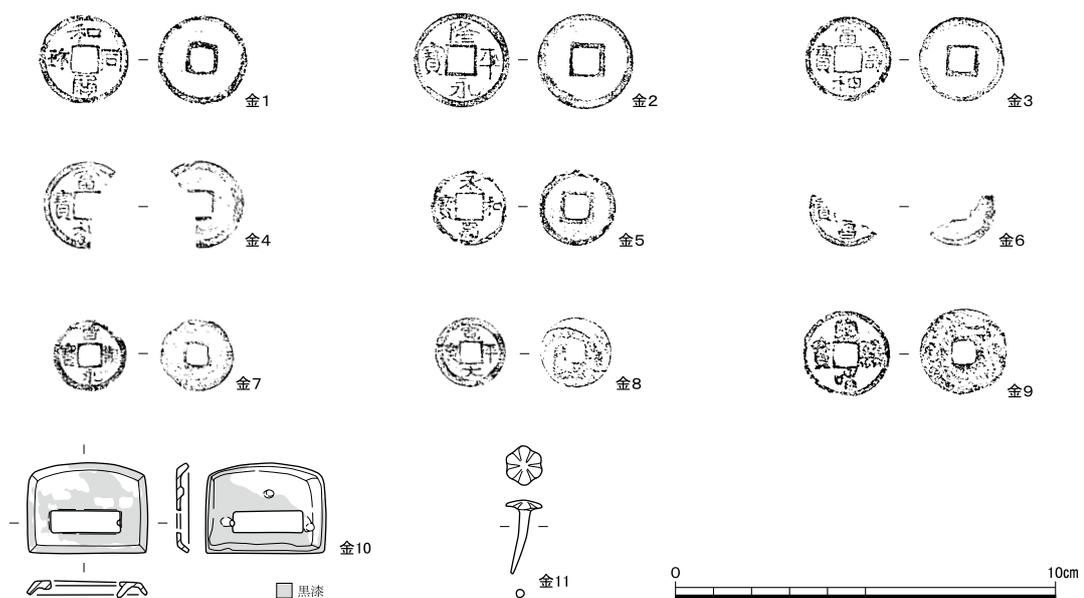


図26 銭貨拓影・金属製品実測図 (1:2)

(8) 動植物遺存体 (図版20、表4)

流れ24や溝19、土坑60などから骨・貝・種実などの動植物遺存体が出土した。

骨 骨は5点出土した。流れ24からウシ右下顎骨、ウシ/ウマ寛骨が出土した。ウシ右下顎骨は、出土時はP2~4、M1~3の計6本が並んでいたが、P2~4は取り上げ時に外れた。P2は破片である⁶⁾。壮齢と推定できる。後臼歯列長は98.3mm。

溝19からウシ右下顎骨が出土した。M1・2が植立。老齢と推定される。M2歯冠高は24.0mm。

築地35からウシ頭蓋骨が出土した。角芯が遺存しており、前頭部と考えられる頭蓋骨と繋がった状態で出土したが、前頭部の遺存状態が悪く、左右は不明である。

土坑60は遺構埋土(約63ℓ)を篩に掛け動物遺存体を抽出し、マダイの下顎骨(右)1点、タイ科の臼歯5点、その他魚骨の小片を採取した。これらは同一個体の可能性がある。また、これらの動物遺存体はいずれも被熱していた。

貝 貝は2点出土した。流れ24からハマグリ1点、溝19からセタシジミ1点が出土した。

種実 種実は流れ24や溝19、土坑60から多量に出土した。

流れ24からモモ核24点、オニグルミ核1点、ウメ核1点が出土した。

溝19からモモ核4点、オニグルミ核2点が出土した。

土坑60は上述のように、遺構埋土を篩に掛け、植物遺存体を抽出した。栽培植物や食用の可能性のある種実は表4の通りである。

土坑79からモモ核1点、築地35からモモ核1点が出土した。

表4 土坑60出土の植物遺存体

	和名	部位	科名	検出数 (最小個体数)
木本	オニグルミ	堅果	クルミ	3
	クリ	堅果	ブナ	3
	ムクノキ	核	ニレ	3
	ウメ	核	バラ	11
	モモ	核	バラ	4
	カラスザンショウ	種子	ミカン	2
	ブドウ属	種子	ブドウ	5
	カキノキ	種子	カキノキ	9
草本	マメ類	種子	マメ	1
	メロン仲間種子(モモルディカ型)	種子	ウリ	30
	メロン仲間種子(マクワ・シロウリ型)	種子	ウリ	91
	メロン仲間種子(ザッソウメロン型)	種子	ウリ	4
	イヌコウジュ属	果実	シソ	1
	ナス属	種子	ナス	87
	ナス	種子	ナス	52
	イネ(炭化)	果実	イネ	35
コムギ(炭化)	果実	イネ	10	

註

- 1) 櫛の各部名称は、大熊久貴「古代横櫛の製作技術」『考古学集刊』第19号 2023年による。
- 2) 本村充保「近畿地方における中世の下駄の様相」『考古学論攷』第44号 2021年
- 3) 奈良文化財研究所の前田仁暉氏のご教示による。
- 4) 龍谷大学文学部の北野信彦氏、山田卓司氏に分析を依頼した。
- 5) 東海大学の丸山真史氏に同定を依頼した。
- 6) 歯は切歯を「I」、犬歯を「C」、前臼歯を「P」、後臼歯を「M」で示し、若い数字が鼻先側を表す。

5. まとめ

(1) 調査地の歴史の変遷

今回の調査では、平安時代前期の流れ、平安時代中期の土坑、平安時代後期の路面・柱列・築地・溝・土坑、鎌倉時代の溝を確認した。

平安時代前期の流れ24は、肩部に洲浜状に礫を敷いている部分も確認できたことから、邸宅の西側に広がる庭園の一部であったとみられる。機能時は北から南に水が流れており、埋土から水深は30cmほどと想定できる。この流れ24からは、多量の遺物が出土しており、とくに緑釉陶器や輸入陶磁器の優品や漆器などの木製品が出土している。流れ24の埋土から出土した遺物の時期は、2 B段階を中心として前後する2 A・2 C段階も確認でき、9世紀中頃～10世紀前半に機能していたと位置づけられる。

なお『拾芥抄』東京図によると、調査地は平安時代前期に光孝天皇皇子の是忠親王（857～922）の御所「南院」が存在したとされる。是忠親王が南院に居を構えた正確な時期は不明であるが、是忠親王が出家した延喜20年（920）に「号南院親王」（『日本紀略』）とあり、少なくとも晩年には南院を居所としていたことがわかる。なお隴谷寿氏は、是忠親王が南院を居所としたのは9世紀末から10世紀前半にかけてとする¹⁾。いずれにしても、流れ24出土土器の年代と同時期ということができ、流れ24は南院の庭園の一部であった可能性がある。

流れ24は10世紀前半にはほぼ一気に埋まった後、平安時代中期から後期に整地され、完全に埋没した。流れ24が埋没した後、平安時代中期の遺構は確認できなかったが、平安時代後期には柱列や土坑などが存在することから、この地は再度宅地として利用されたようである。

平安時代後期では、柱列1・2や、路面2と築地35、溝19、井戸64、土坑20・60・79などを確認した。調査地は、平安京左京四条一坊五町内の中央西端に位置しており、Y=-23,321.30付近の南北ラインが坊城小路東築地心の想定位置にあたる。路面2は坊城小路、築地35は坊城小路に伴う築地の基礎とみられる。路面2の礫層や下層の溝55から5 B段階の土器が出土しており、平安時代後期に宅地を再整備する時期に、道路関連遺構も再整備されたとみられる。

鎌倉時代には、溝13・61・63を確認した。溝13は路面2に伴う東側溝と考えられる。層位から中世の遺構とみられるが、路面2は平安時代後期には存在しており、平安時代の東側溝も元々ほぼ同位置に存在していたと考えられる。また、調査区の西半の遺構面は中世に削平されている。

(2) 平安時代後期の将棋駒（表5）

今回の調査では、土坑60から将棋駒が3点出土した（図20 - 木16～18）。土坑60では他にも多量の土器類や木製品が出土しており、5 B段階（12世紀中頃～後半）と考えられる。出土した将棋駒の種類は、王将1点（木16）、金将1点（木17）、歩兵1点（木18）である。

平安時代の将棋駒出土例は全国で12例あり²⁾、京都市では鳥羽離宮跡で平安時代後期の「歩兵」が

出土している。奈良県興福寺旧境内では、1992年度の調査で井戸状遺構から出土した将棋駒16点が「天喜六年」(1058) 銘の題箋軸と共に出土しており、現在のところ日本最古の出土例として知られる³⁾。また興福寺旧境内2013年度の調査でも井戸や土坑から計12点の将棋駒が出土している。中でも、10点の将棋駒が出土した井戸SE03からは「承德二年」(1098) 銘の題箋軸も共伴する⁴⁾。

「王将」の成立

今回出土した木16は「王将」と記されており、王将駒である。裏面に文字は確認できなかった。

平安時代の「王将」もしくは「玉将」と記された駒の出土例は、上述の興福寺旧境内で3点、大阪府四条畷市の上清滝遺跡で1点の計4点である。やや時代が下るが鳥羽離宮跡第135次でも1点出土している。

興福寺旧境内1992年度の調査では、出土した王将の駒3点にはすべて「玉将」と記されていた。うち2点は裏面にも文字が確認でき、1点は表面と同様に「玉将」、もう1点は「□(成カ)□」と2文字が縦方向に記されていた。

上清滝遺跡の出土例には、表面に「王将」と記され、裏面に文字はなかった。この将棋駒は、旧河川の埋土から「寿永三年」(1184) 銘の木簡と共に出土した。

鳥羽離宮第135次では、溝から「建仁三」年(1203) 銘の供養札とみられる木簡と共に出土した。表面に「王将」と記され、裏面には文字はなかった。

「王将」の成立について三宅弘氏は、平安時代後期の史料を基にして鎌倉時代初期に成立したとされる『二中歴』には「玉将」の記載しかないことから、元々は「玉将」のみが存在していた可能性を示唆する⁵⁾。興福寺旧境内で出土した平安時代(11世紀中頃)の王将の駒3点も、すべてが「玉

表5 平安時代の将棋駒出土例一覧表

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	内容	年代	備考
1	興福寺旧境内1	奈良県奈良市	井戸状遺構	玉将3、金将4、銀将1、桂馬1、歩兵6	11世紀中頃	「天喜六年」(1058) 銘の題箋軸と共伴
2	興福寺旧境内2	奈良県奈良市	井戸SE01	香車1	11世紀後半～12世紀前半	
3	〃	〃	井戸SE03	酔象1、桂馬1、歩兵5	11世紀後半～12世紀前半	「承德二年」(1098) 銘の題箋軸と共伴
4	〃	〃	土坑35	歩兵1	12世紀中頃	
5	深田遺跡	兵庫県日高町		歩兵1	11世紀末	嘉保(1094～1095) 銘の木簡と共伴
6	城輪遺跡	山形県酒田市	井戸	歩兵1	11世紀末～12世紀	
7	鳥羽離宮跡第77次	京都府京都市	溝SD2	歩兵1	平安時代後期	
8	柳之御所跡第28次	岩手県平泉町	池SG1	歩兵1	12世紀後半	
9	柳之御所跡第84次	岩手県平泉町	井戸84SK10	銀将1	12世紀	
10	上清滝遺跡	大阪府四条畷市	旧河川	王将1、歩兵1	12世紀後半	「寿永三年」(1184) 銘の木簡と共伴
11	中尊寺金剛院跡	岩手県平泉町	整地土	金将1、銀将3、桂馬2、香車1、歩兵5	12世紀前半	
12	志羅山遺跡第88次	岩手県平泉町	整地土	飛龍1	12世紀	嘉保(1094～1095) 銘の木簡と共伴

将」であった。

さて、今回出土した「王将」の時期は、共伴する土師器から5B段階とすることができる。実年代にするとおおよそ1140～1170年の30年間にあたり、これまでに確認された中で最も古い「王将」であるといえる。

今回出土した「王将」の駒から、12世紀半ばから後半には「王将」が存在していたことがわかった。

参考文献

清水康二「東アジア盤上遊戯史研究」明治大学大学院文学研究科2016年度博士学位請求論文 明治大学
2017年

清水康二「小将棋の成立と変遷に関する再検討」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要 26』大
阪商業大学アミューズメント産業研究所 2024年

註

- 1) 「南院①」『平安時代史事典』 角川書店 1994年
- 2) 小泉信吾「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集第1集』 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年、三宅弘「将棋史研究ノート（4）－将棋の伝来と日本化の条件－」『滋賀文化財だより』No.200 財団法人滋賀県文化財保護協会 1994年を参考にした。
- 3) 清水康二・小栗明彦「奈良・興福寺旧境内」『奈良県遺跡調査概報1992年度』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所 1993年
- 4) 鈴木一議編『名勝 奈良公園・興福寺跡－興福寺子院観音院跡の調査－』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第122冊 奈良県立橿原考古学研究所 2017年
- 5) 三宅弘「将棋史研究ノート（3）－王将と玉将－」『紀要 第6号』 財団法人滋賀県文化財保護協会 1993年

付章 自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

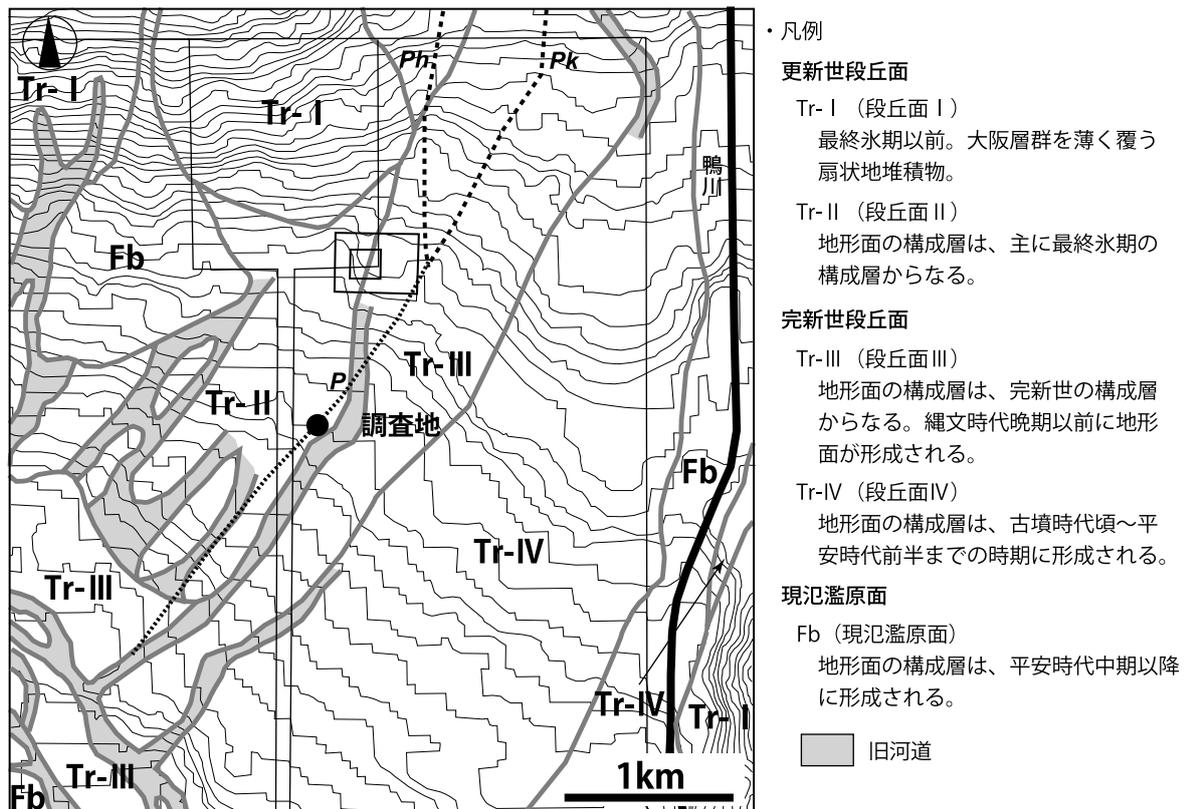
(1) 放射性炭素年代測定

1. はじめに

壬生坊城町調査地の平安時代の遺構の基盤をなす堆積物の形成年代をより検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

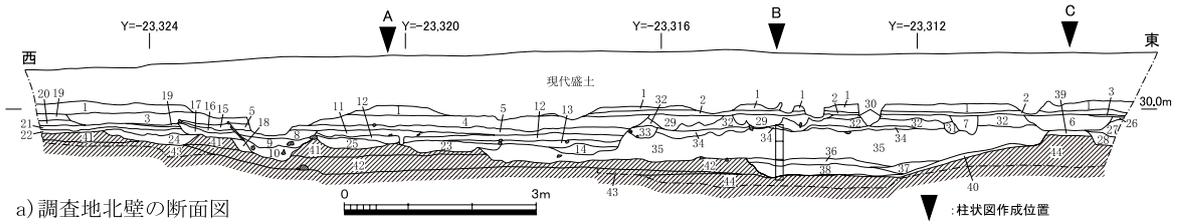
2. 試料と方法

調査地点の位置を図1、試料採取地点の断面写真、柱状図、分析層準、不攪乱柱状堆積物試料の断面写真を図2に示す。古代の遺構の基盤堆積物は、流路河床もしくは布状洪水堆積物と推定されるトラフ型斜交葉理をなす砂礫層（44～42層）と、洪水堆積物と推定される砂礫層の高まり周囲の低所を埋積する細粒な砂質堆積物（41層・38～36層）からなる。年代測定試料は、古代遺構掘削時の擾乱が及んでいる36層中の木材（試料14C-2：PLD-54873）と、44層中の砂礫層に挟在する

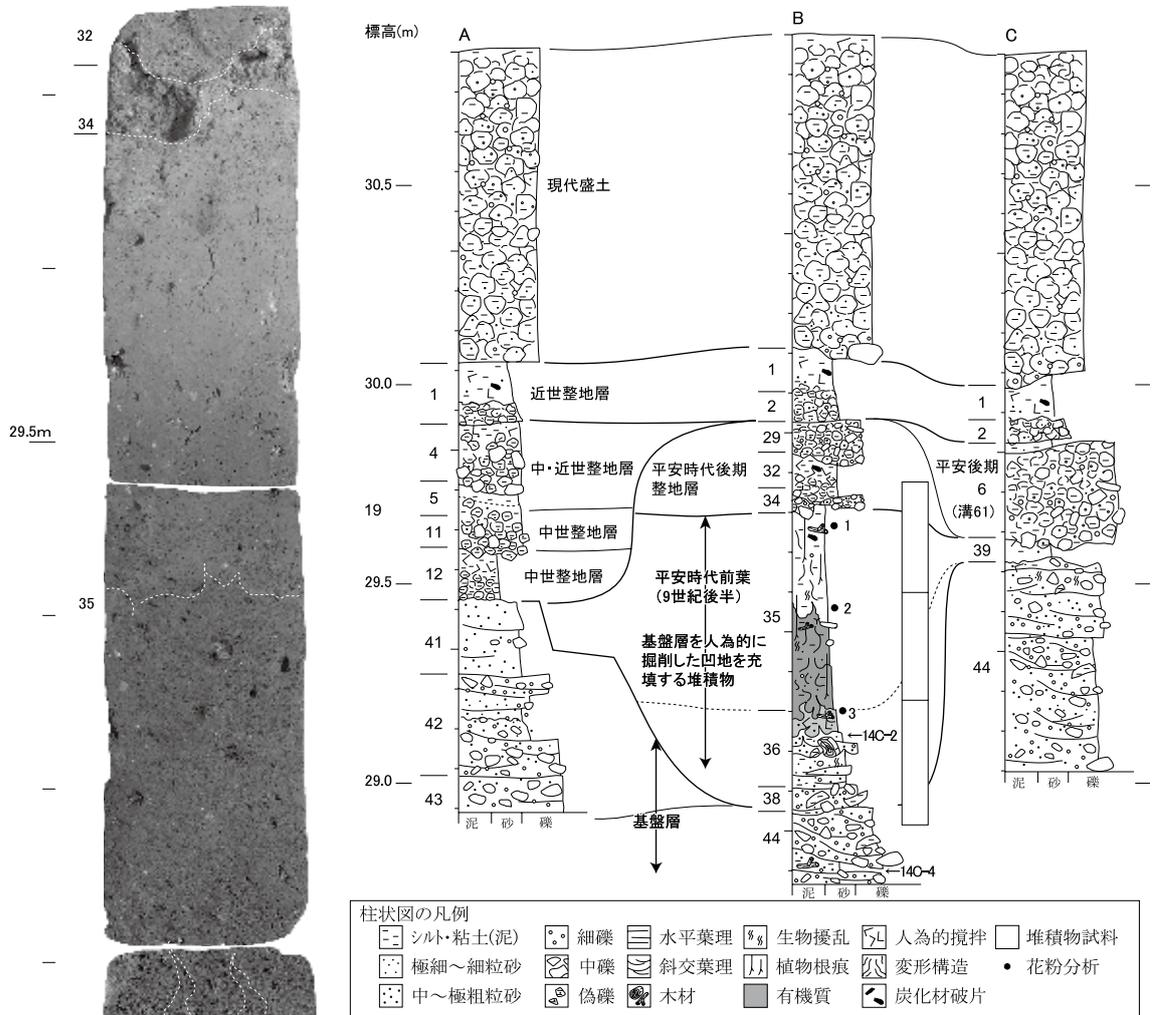


・等高線は、河角（2004）の所収の第7図の等高線（1m間隔）を再トレースした。
・地形と旧河道の区分は、河角（2004）の所収の第2図の地形分類図を簡略化した。
・Ph（古堀川谷）、Pk（古烏丸谷）、P（古堀川）のラインは、横山（1988）所収の図と河角（2004）の所収の第7図を合成して作成した。
地形学図は、森・辻（2021）より引用

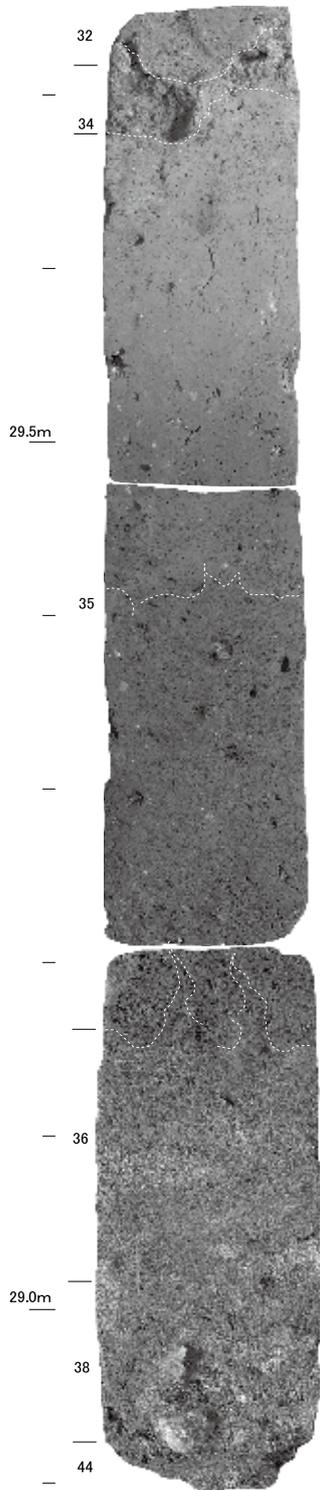
図1 調査地の位置



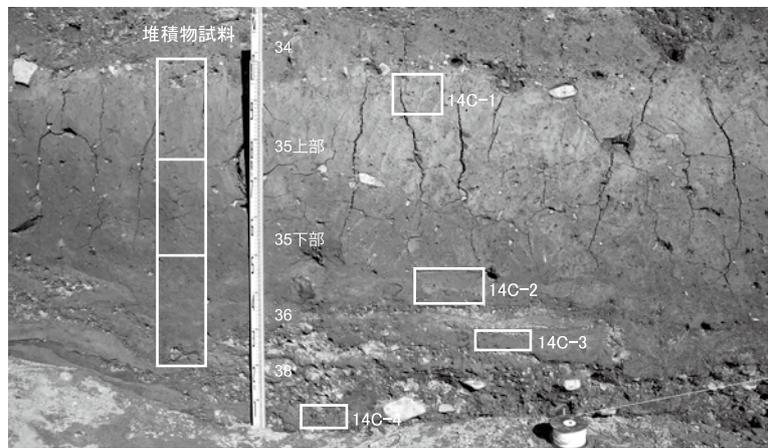
a) 調査地北壁の断面図



b) 調査地点の模式柱状図



c) 堆積物試料写真



d) 調査地点の断面写真および試料採取位置

図2 調査地点の層序

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-54873	試料No. 14C-2 層位：36層	種類：生材（最外年輪3年分） 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-54874	試料No. 14C-4 層位：44層	種類：生材（若年枝：1～2年） 試料の性状：最終形成年輪含む 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲(上段:cal BC 下段:cal BP)	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-54873 試料No. 14C-2	-26.67 \pm 0.19	2881 \pm 21	2880 \pm 20	1109-1092 cal BC (13.85%) 1083-1066 cal BC (13.62%) 1057-1013 cal BC (40.80%)	1188-1179 cal BC (1.17%) 1155-1148 cal BC (0.85%) 1126- 984 cal BC (93.23%) 942- 940 cal BC (0.20%)
				3058-3041 cal BP (13.85%) 3032-3015 cal BP (13.62%) 3006-2962 cal BP (40.80%)	3137-3128 cal BP (1.17%) 3104-3097 cal BP (0.85%) 3075-2933 cal BP (93.23%) 2891-2889 cal BP (0.20%)
PLD-54874 試料No. 14C-4	-26.40 \pm 0.20	7303 \pm 27	7305 \pm 25	6221-6157 cal BC (44.52%) 6153-6129 cal BC (16.17%) 6101-6089 cal BC (7.59%)	6225-6080 cal BC (95.45%)
				8170-8106 cal BP (44.52%) 8102-8078 cal BP (16.17%) 8050-8038 cal BP (7.59%)	8174-8029 cal BP (95.45%)

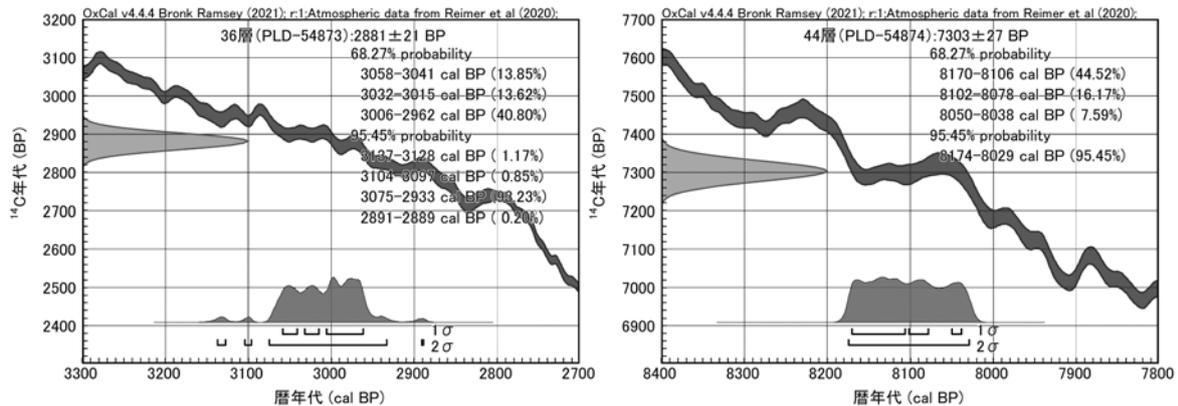


図3 暦年較正結果

木材（14C-4：PLD-54874）の2点である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図3に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

測定結果を 2σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して、試料の年代について検討する。なお、暦年較正結果と考古学編年との対応関係については、小林（2017）を参照した。

36層中の木材（試料14C-2：PLD-54873）は、¹⁴C年代で 2880 ± 20 BP、暦年代で3137-3128 cal BP（1.17%）、3104-3097 cal BP（0.85%）、3075-2933 cal BP（93.23%）、2891-2889 cal BP（0.20%）の暦年代を示した。この年代は縄文時代後期末～縄文時代晩期前葉に相当する。

44層中の木材（試料14C-4：PLD-54874）は、¹⁴C年代で 7305 ± 25 BP、暦年代で8174-8029 cal BP（95.45%）の暦年代を示した。この年代は、縄文時代早期後葉に相当する。

今回の調査区は、河角（2004）の地形分類図による段丘面Ⅱ面東端から段丘面ⅡとⅢの地形境界を流下する旧河道にかけて位置している（図1）。この地形境界を流下する旧河道は、横山（1988）

による古堀川および古堀川谷・古烏丸谷に相当する可能性が高い。上記の年代測定結果を踏まえ
ると、調査区の古代の遺構の基盤をなす流路充填堆積物あるいは布状洪水堆積物と推定される砂
礫層は、横山（1988）による古堀川および古堀川谷・古烏丸谷を充填した、完新世に堆積した堆積
物（完新統）と推定される。基盤堆積物上部は、平安時代以降の人為的な土地改変により削平され
ているため上部の堆積年代は不明であるが、少なくとも縄文時代晩期頃までは流路として機能し
ていたことが推定される。

（文責：パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻本裕也）

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.

河角龍典（2004）歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水
害史の再構築－. 京都歴史災害研究, 1, 13～23.

小林謙一（2017）「縄文時代の実年代－土器形式編年と炭素14年代－. 同成社, 263p.

森 将志・辻 康男（2021）1. 花粉分析. 京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡、
壬生遺跡」: 54－69., 京都市埋蔵文化財研究所., 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の
14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H.,
Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen,
K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W.,
Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M.,
Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F.,
Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age
calibration curve (0-55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

横山卓雄（1988）平安遷都と鴨川つけかえ：歴史と自然史の接点. 235p, 法政出版.

(2) 花粉分析

1. はじめに

壬生坊城町調査地で検出された平安時代前期頃の堆積物試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、古代の遺構の基盤層上部を掘削した凹地を充填する湿地もしくは浅い滞水域の堆積物である36層上部～35層から採取された3試料（No.1～3）である（表3）。採取地点の層序は、年代測定の項を参照されたい。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

試料（湿重量約3～4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、主要な分類群の単体標本（PLC.4230～4236）を作製し、写真を図5に載せた。

3. 結果

3試料から検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉24、草本花粉25、形態分類のシダ植物胞子2の、総計51である。これらの花粉・胞子の一覧表を表4に、花粉分布図を図4に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図および表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

3試料はほぼ同様な花粉組成を示しており、樹木花粉ではスギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属の産出が目立つ。草本花粉はいずれもイネ科の産出率が高い。また、35層上部（No.1）ではソバ属が、36層上部（No.3）ではゴマ属が得られている。

4. 考察

36層上部・35層中部・35層上部では、同様の花粉組成を示しているため、各層の堆積時期には類似した植生が広がっていたと考えられる。樹木花粉では、スギ属やイチイ科

表3 分析試料一覧

試料No.	層位	岩質
1	35層上部	灰色(5Y4/1)粘土
2	35層中部	黄灰色(2.5Y4/1)シルト
3	36層上部	オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂

表4 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	上段：層名 下段：試料No.		
		35上部	35中部	36上部
		No. 1	No. 2	No. 3
樹木				
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	1	-
<i>Abies</i>	モミ属	3	4	8
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	2	2
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	5	5	5
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	4	4	2
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	58	53	49
Taxaceae—Cephalotaxaceae—Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	34	28	37
<i>Pterocarya—Juglans</i>	サワグルミ属—クルミ属	1	1	2
<i>Carpinus—Ostrya</i>	クマシデ属—アサダ属	2	4	5
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	6	3
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	-	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	17	14	9
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	57	64	57
<i>Castanea</i>	クリ属	2	7	6
<i>Castanopsis—Pasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	12	12	9
<i>Ulmus—Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	1	1	3
<i>Celtis—Aphananthe</i>	エノキ属—ムクノキ属	3	-	-
<i>Acer</i>	カエデ属	-	-	1
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	1	-	1
<i>Cleyera—Eurya</i>	サカキ属—ヒサカキ属	-	-	1
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	-	-	1
Ericaceae	ツツジ科	-	1	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	1	1
草本				
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	1
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	-	1	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1	6	3
Gramineae	イネ科	122	99	163
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	6	21
<i>Commelina</i>	ツユクサ属	-	-	1
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	40	21	1
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	-	-	3
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria—Echinocaulon</i>	サナエタデ節—ウナギツカミ節	1	1	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	-	-
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	3	1	-
<i>Portulaca</i>	スベリヒユ属	1	-	-
Ranunculaceae	キンボウゲ科	-	1	-
Brassicaceae	アブラナ科	8	-	2
Leguminosae	マメ科	-	1	-
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	-	1	-
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	-	-	1
Apiaceae	セリ科	-	-	3
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	6	3	5
<i>Sesamum</i>	ゴマ属	-	-	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属	-	1	1
<i>Actinostemma—Gynostemma</i>	ゴキツル属—アマチャヅル属	-	-	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	27	5
Tubuliflorae	キク亜科	3	2	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	5	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	206	208	202
Nonarboreal pollen	草本花粉	201	172	214
Spores	シダ植物孢子	-	-	-
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	407	380	416
unknown	不明	9	2	16

–イヌガヤ科–ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属–マテバシイ属の産出が目立ち、これらの分類群から考えると、遺跡周辺にはスギ属やイチイ科–イヌガヤ科–ヒノキ科などからなる温帯性針葉樹林や、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属–マテバシイ属からなる照葉樹林が分布していた可能性がある。また、マツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属といった二次林要素の分類群の産出も見られ、遺跡周辺の開けた明るい場所にニヨウマツ類やナラ類、クリなどからなる二次林も分布していた可能性がある。

草本花粉ではイネ科の産出率が高いため、試料採取地点周辺にイネ科が生育していた可能性がある。あるいは、イネ科の高率に加え、サジモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属といった水田雑草を含む分類群が共産している点から考えると、試料採取地点周辺に水田が存在していた可能性もある。さらには、No.1ではソバ属が、No.3ではゴマ属が産出しており、当時期には試料採取地点周辺でソバやゴマが栽培されていた可能性がある。

今回の調査地北西約900mに位置する平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡では、9世紀初頭から10世紀前半にかけて花粉化石群集の変遷が確認されている（森・辻，2021）。9世紀初頭の層準では、スギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出が目立ち、9世紀初頭から後半にかけてスギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出とともに、モミ属やツガ属、マツ属複維管束亜属が増加傾向を示している。この傾向は平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡の北東側に隣接する平安京右京三条一坊六・七町跡でも確認されている（パリオ・サーヴェイ株式会社，2013）。今回調査地の花粉化石群集は、これら9世紀頃の花粉化石群集に類似することから、生層序対比される可能性が高い。ただし、今回の調査地では、針葉樹のモミ属やツガ属、マツ属複維管束亜属の顕著な増加傾向は認められず、針葉樹のイチイ科–イヌガヤ科–ヒノキ科の産出率が比較的高く、多少の差異が生じている。この地点間差異については、地形発達や土地利用状況、それらに起因する花粉化石群集の形成過程や局所的な植生の違いが関係している可能性がある。平安京域の花粉分析結果をみると、平安時代の層準でマツ属のやや多い花粉組成がみられるようになるが、屋敷跡の池埋土などを分析した場合、庭木として植えられた樹木の花粉が影響することが想定されている（佐々木ほか，2011）。上記の平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡では、花粉化石と大型植物遺体の産状から、9世紀後半の池周辺にマツ属が植栽されていた可能性が指摘されている。

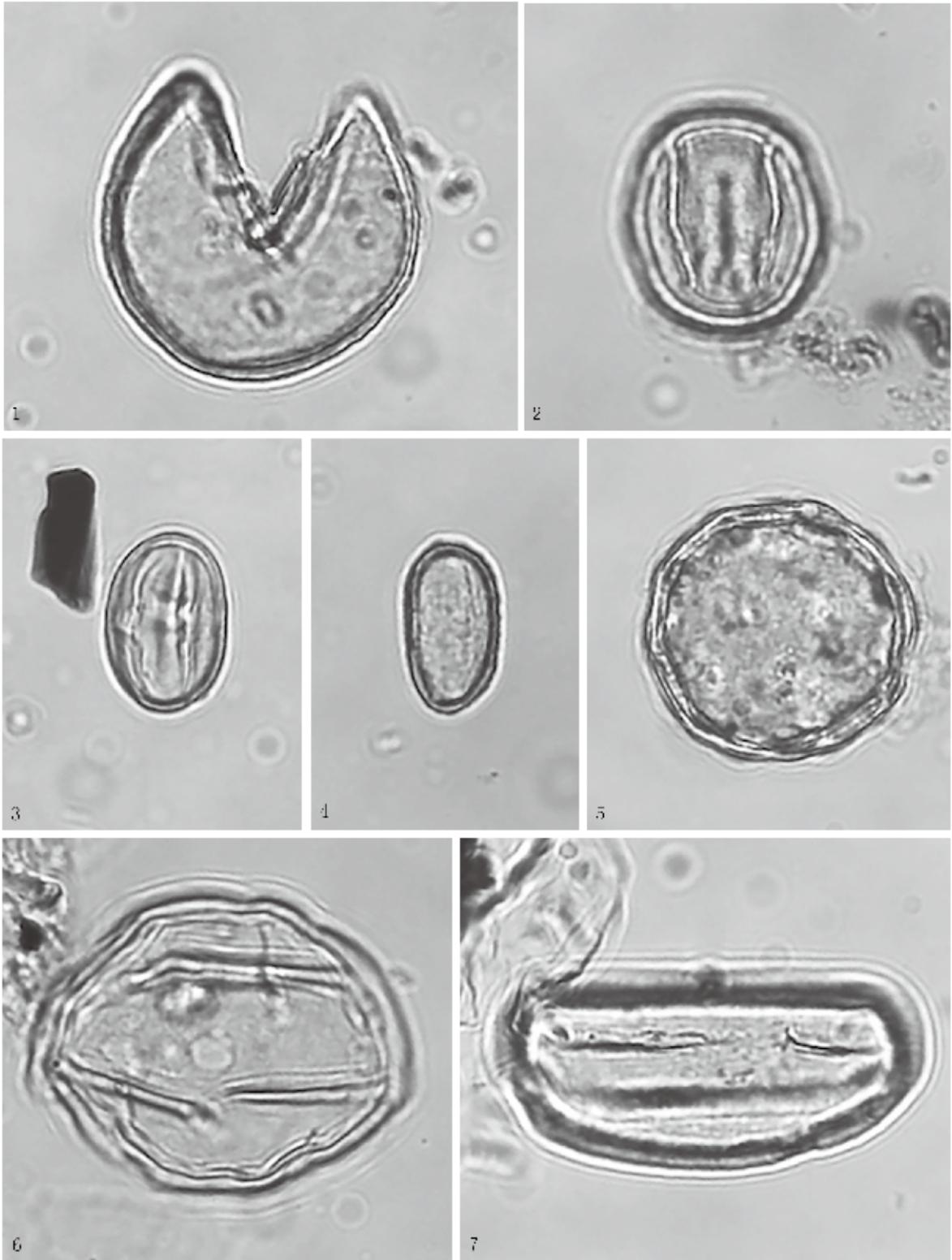
（文責：森 将志・辻本裕也）

引用文献

森 将志・辻 康男（2021）1. 花粉分析. 京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡」：54–69. 京都市埋蔵文化財研究所. , 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所.

佐々木 尚子・高原 光・湯本 貴和（2011）堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における「里山」林の成立過程.115-127

パリオ・サーヴェイ株式会社（2013）自然科学分析. 京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡」：133-171. 京都市埋蔵文化財研究所.



- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1. スギ属 (PLC. 4230) | 2. コナラ属アカガシ亜属 (PLC. 4231) |
| 3. クリ属 (PLC. 4232) | 4. シイノキ属-マテバシイ属 (PLC. 4233) |
| 5. サジオモダカ属 (PLC. 4234) | 6. イネ科 (PLC. 4235) |
| 7. ミズアオイ属 (PLC. 4236) | |

図5 No.2から産出した花粉化石

付表1 土器類観察表

番号	種類	器形	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
1	土師器	椀A	流れ24	13.0		3.1	10YR8/2 灰白色	長石、石英、チャート、赤色粒	
2	土師器	椀A	流れ24	13.2		2.9	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、チャート、赤色粒	
3	土師器	椀A	流れ24	15.4		(3.3)	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、チャート	
4	土師器	椀A	流れ24	16.0		3.6	7.5YR7/4 にぶい橙色	長石、石英、チャート、赤色粒	
5	土師器	椀A	流れ24	14.0		3.0	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、赤色粒	大和産
6	土師器	椀A	流れ24	14.0		3.1	2.5YR7/2 灰黄色	長石、石英、チャート	大和産
7	土師器	杯B	流れ24	16.0	8.4	3.7	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、赤色粒	
8	土師器	杯B	流れ24		12.0	(5.1)	10YR8/2 灰白色	長石、石英、チャート	
9	土師器	高杯	流れ24	29.6		(3.4)	10YR7/2 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート	
10	土師器	高杯	流れ24			(16.4)	10YR8/2 灰白色	長石、石英、チャート、赤色粒	
11	土師器	壺	流れ24	4.8		8.5	2.5Y8/2 灰白色	長石、石英、チャート、角閃石、赤色粒	
12	黒色土器	杯	流れ24	19.8		(5.3)	(外)N2/0 黒色 (内)5YR6/4 にぶい橙色	長石、石英、雲母、チャート	内面のみ黒色化(A類)
13	黒色土器	杯	流れ24			(1.9)	(外)N3/0 暗灰色 (内)5YR5/3 にぶい赤褐色	長石、石英、チャート	内面のみ黒色化(A類)
14	黒色土器	椀	流れ24	15.4	7.2	4.3	(外)N3/0 暗灰色 (内)10YR6/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート	内面のみ黒色化(A類)
15	黒色土器	椀	流れ24	15.4	7.8	4.4	(外)N2/0 黒色 (内)10YR6/4 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、赤色粒	内面のみ黒色化(A類)
16	黒色土器	椀	流れ24	21.5	9.6	6.4	N2/0 黒色	長石、石英、チャート	両面 黒色化(B類)
17	須恵器	杯B	流れ24	14.9	7.2	8.7	N4/0 灰色	長石	
18	須恵器	鉢	流れ24	14.8	7.4	8.1	N7/1 灰白色	長石、チャート	
19	須恵器	長頸壺	流れ24	8.6		(6.8)	N8/0 ~N4/0 灰色	長石、チャート	
20	須恵器	短頸壺	流れ24	9.0		(11.5)	N6/0 灰色	長石、石英、チャート	
21	須恵器	甕	流れ24	22.4		(8.9)	N5/0 灰色	長石、チャート	
22	白色土器	皿	流れ24	11.6	5.8	2.5	2.5Y8/1 灰白色	チャート	
23	白色土器	高杯	流れ24			(8.1)	2.5Y8/1 灰白色	長石、石英	
24	緑釉陶器	皿	流れ24	14.4	6.1	3.2	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)5Y5/3 灰オリーブ色	チャート、赤色粒	京都産
25	緑釉陶器	皿	流れ24	14.4	6.0	2.6	(胎土)2.5Y8/1 灰白色 (釉)7.5Y4/1 灰色	長石、石英、チャート	京都産
26	緑釉陶器	皿	流れ24	14.7	6.2	3.1	(胎土)N7/0 灰白色 (釉)10Y4/1 灰色	長石、黒色粒	猿投産
27	緑釉陶器	皿	流れ24	13.2		(2.1)	(胎土)2.5Y8/1 灰白色 (釉)10Y4/1 灰色	長石、黒色粒	猿投産
28	緑釉陶器	皿	流れ24	14.0		(1.8)	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)7.5Y5/2 灰オリーブ色	長石、石英、チャート	京都産
29	緑釉陶器	椀	流れ24	12.6	5.6	3.9	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)7.5Y5/2 灰オリーブ色	長石、石英、チャート	京都産
30	緑釉陶器	椀	流れ24	16.3	7.0	5.0	(胎土)5Y8/1 灰白色 (釉)7.5Y4/1 灰色	長石、石英、チャート	京都産
31	緑釉陶器	椀	流れ24		6.8	(4.4)	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)2.5Y5/3 黄褐色	長石、チャート	京都産
32	緑釉陶器	椀	流れ24		7.8	(4.1)	(胎土)N6/0 灰色 (釉)10Y4/2 オリーブ灰色	長石、石英、チャート	京都産
33	緑釉陶器	椀	流れ24	19.2	8.5	6.2	(胎土)2.5Y8/2 灰白色 (釉)N3/0 暗灰色	長石、チャート	京都産

※()は残存値

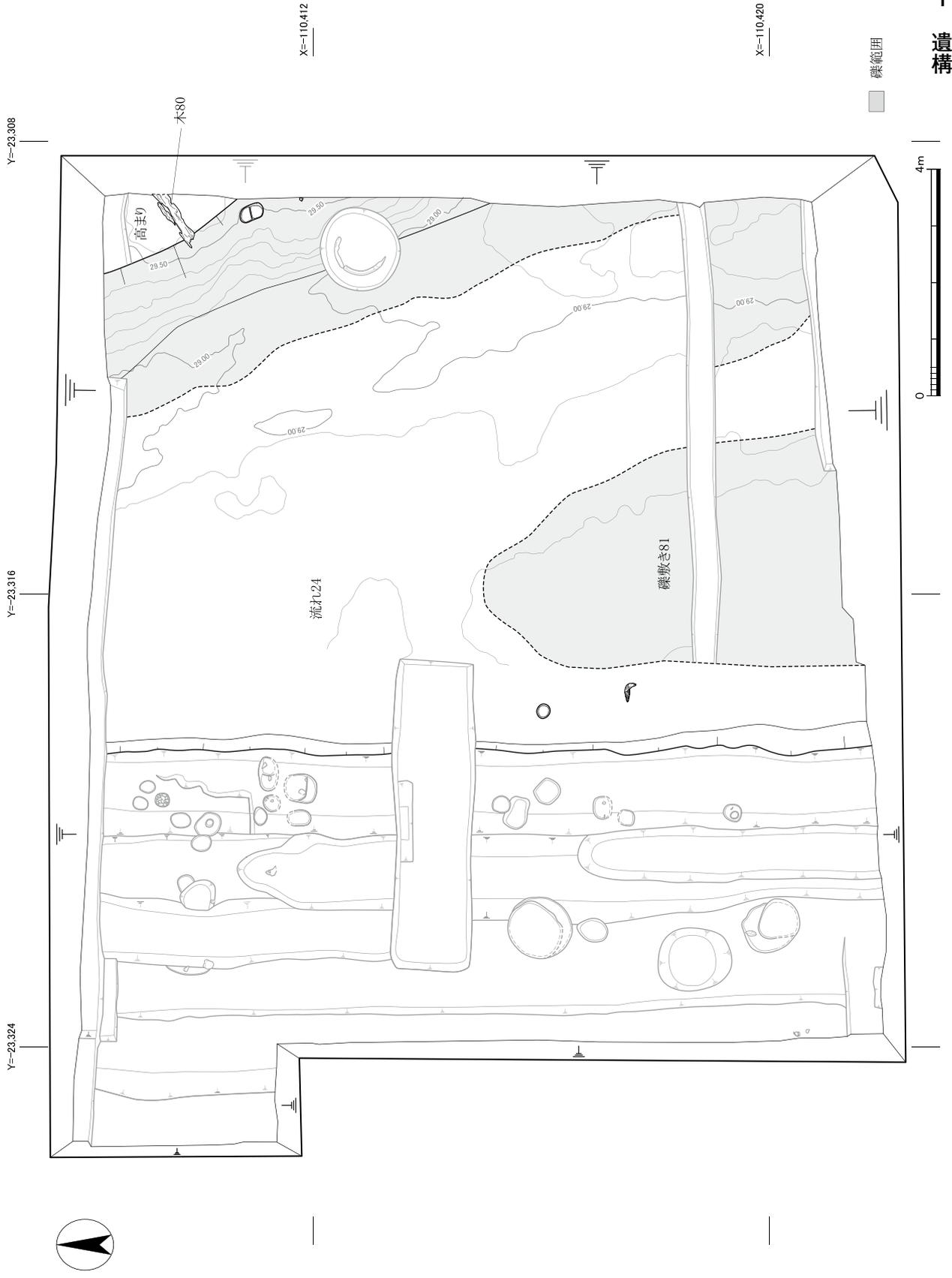
番号	種類	器形	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
34	緑釉陶器	椀	流れ24	17.6	8.0	6.4	(胎土)10YR7/1 灰白色 (釉)N4/0 灰色	長石、黒色粒	京都産
35	緑釉陶器	椀	流れ24		6.6	(2.2)	(胎土)N7/0 灰白色 (釉)7.5Y5/1 灰オリーブ色	長石、チャート	京都産
36	灰釉陶器	皿	流れ24	14.5	7.0	2.9	7.5YR7/1 明褐色	長石	硯に転用
37	灰釉陶器	皿	流れ24	16.2	6.9	3.1	N7/0 灰白色	チャート	硯に転用
38	灰釉陶器	椀	流れ24	13.9	7.0	4.4	(胎土)2.5Y8/1 灰白色 (釉)7.5Y5/3 灰オリーブ色	長石、黒色粒	
39	灰釉陶器	椀	流れ24	17.6	9.0	5.7	N6/0 灰白色		猿投産
40	土師器	皿N	柱列1 (柱穴38)	9.4		1.6	2.5Y8/1 灰白色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
41	土師器	皿N	柱列1 (柱穴40)	9.8		1.7	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、チャート	
42	土師器	皿N	柱列2 (柱穴43)	8.8		1.6	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート	
43	土師器	皿N	柱列2 (柱穴48)			2.7	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
44	土師器	皿N	平坦面14	14.0		(2.9)	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
45	白磁	梅瓶	平坦面14		7.5	(7.6)	(胎土)2.5Y8/1 灰白色 (釉)7.5Y8/1 灰白色	黒色粒	
46	土師器	皿A	築地35	9.4		1.6	7.5YR8/4 浅黄橙色	長石、石英、チャート	
47	土師器	皿A	築地35	9.8		1.6	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
48	土師器	皿A	築地35	9.8		1.6	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石、石英、チャート	
49	土師器	皿A	築地35	10.0		1.5	7.5YR8/4 浅黄橙色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
50	土師器	皿A	築地35	10.0		1.8	10YR8/4 浅黄橙色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
51	土師器	皿Ac	築地35	10.2		1.1	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母	
52	土師器	皿N	築地35	8.4		1.5	7.5YR8/6 浅黄橙色	長石、石英、雲母、チャート	
53	土師器	皿N	築地35	10.3		2.0	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
54	土師器	皿N	築地35	14.4		2.5	7.5YR7/4 にぶい橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
55	土師器	皿N	築地35	14.8		2.4	7.5YR8/4 浅黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
56	土師器	皿N	築地35	15.0		2.3	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
57	土師器	皿N	築地35	15.0		2.4	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、チャート	
58	緑釉陶器	水注	築地35				(胎土)2.5Y7/1 灰白色 (釉)10YR6/2 オリーブ灰色		美濃産か
59	土師器	皿N	溝13	8.8		1.9	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、雲母、チャート	
60	土師器	皿N	溝13	14.0		(2.4)	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
61	土師器	皿N	溝13	14.8		(2.1)	10YR8/3 浅黄橙色	長石、石英、雲母、チャート、 赤色粒	
62	土師器	皿N	溝19	13.4		3.1	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
63	土師器	皿N	溝19	13.8		2.6	10YR8/3 灰白色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
64	土師器	皿N	溝19	14.6		3.3	7.5YR7/4 にぶい橙色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
65	山茶椀	椀	溝19	17.3	8.1	5.3	2.5YR7/1 灰白色	長石、石英、チャート	尾張産
66	青磁	香炉蓋	溝19	11.9		(3.8)	(胎土)5Y8/1 灰白色～ 7.5YR8/3 浅黄橙色 (釉)10Y7/2 灰白色		越州窯

※ () は残存値

番号	種類	器形	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考
67	白磁	水注	溝19				(胎土)N8/0 灰白色 (釉)10Y7/1 灰白色		
68	土師器	皿N	土坑20	15.8		(3.7)	2.5Y8/2 灰白色	長石、石英、チャート	
69	土師器	皿N	土坑20	15.8		3.5	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、チャート	
70	土師器	皿N	土坑60	8.7		1.8	2.5Y7/2 灰黄色	長石、石英、チャート、 赤色粒	
71	土師器	皿N	土坑60	8.8		1.5	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チ ャート	
72	土師器	皿N	土坑60	9.0		1.4	10YR8/2 灰白色	長石、石英、雲母、チ ャート	
73	土師器	皿N	土坑60	9.2		2.0	2.5Y7/2 灰黄色	長石、石英、雲母、チ ャート	
74	土師器	皿N	土坑60	9.3		1.6	2.5Y8/2 灰白色	長石、石英、雲母、チ ャート	
75	土師器	皿N	土坑60	9.4		1.5	2.5Y8/1 灰白色	長石、石英、チャート	
76	土師器	皿N	土坑60	9.4		2.4	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チ ャート	
77	土師器	皿N	土坑60	13.5		2.4	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チ ャート、赤色粒	
78	土師器	皿N	土坑60	13.5		2.9	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、チャート	
79	土師器	皿N	土坑60	13.6		2.7	10YR8/2 灰白色	長石、石英、チャート	
80	土師器	皿N	土坑60	13.6		3.0	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チ ャート、赤色粒	
81	土師器	皿N	土坑60	13.7		2.8	10YR6/3 にぶい黄橙色	長石、石英、雲母、チ ャート、赤色粒	
82	土師器	皿N	土坑60	13.8		3.4	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石、石英、チャート	
83	土師器	皿N	土坑60	14.0		2.6	2.5Y7/2 灰黄色	長石、石英、雲母、チ ャート	
84	土師器	皿N	溝状土坑79	14.0		3.2	2.5Y7/2 灰黄色	長石、石英、チャート	
85	土師器	皿N	溝63	12.0		3.6	10YR8/1 灰白色	長石、石英、チャート	

※ () は残存値

圖 版



第2面〔平安時代前期〕平面図（1：100）

図版2 遺構

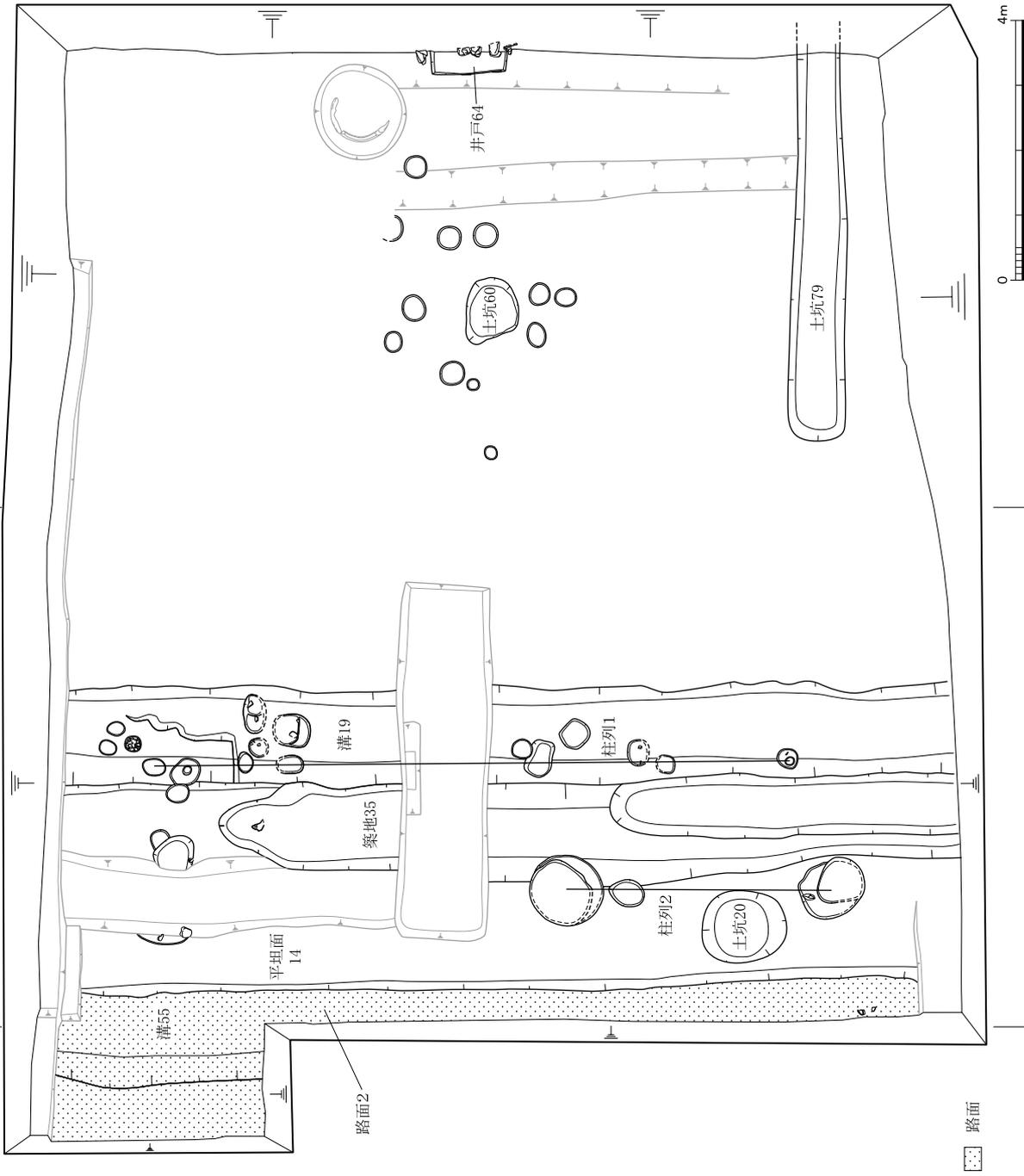
Y=-23.308

Y=-23.316

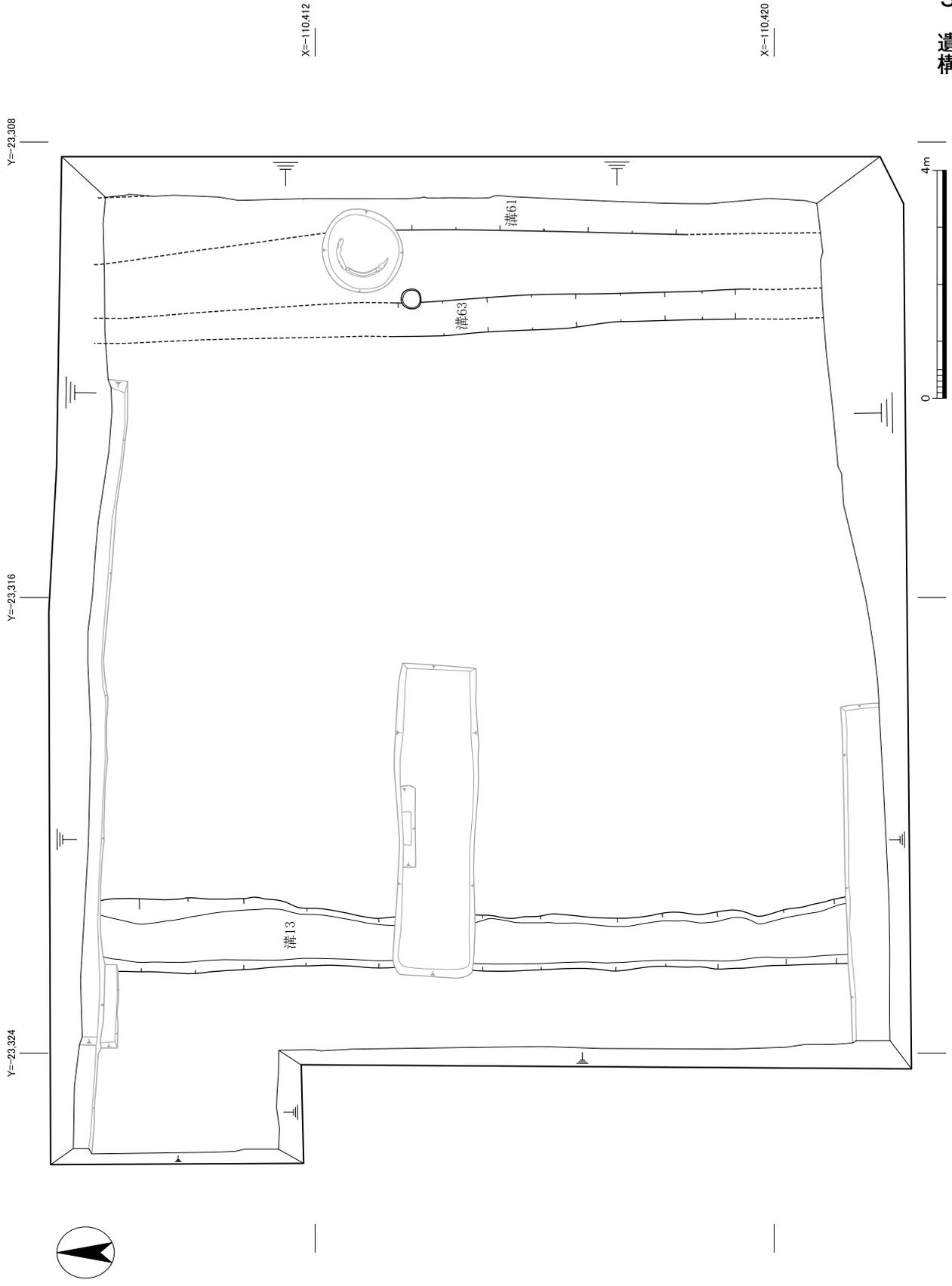
Y=-23.324

X=-110.412

X=-110.420

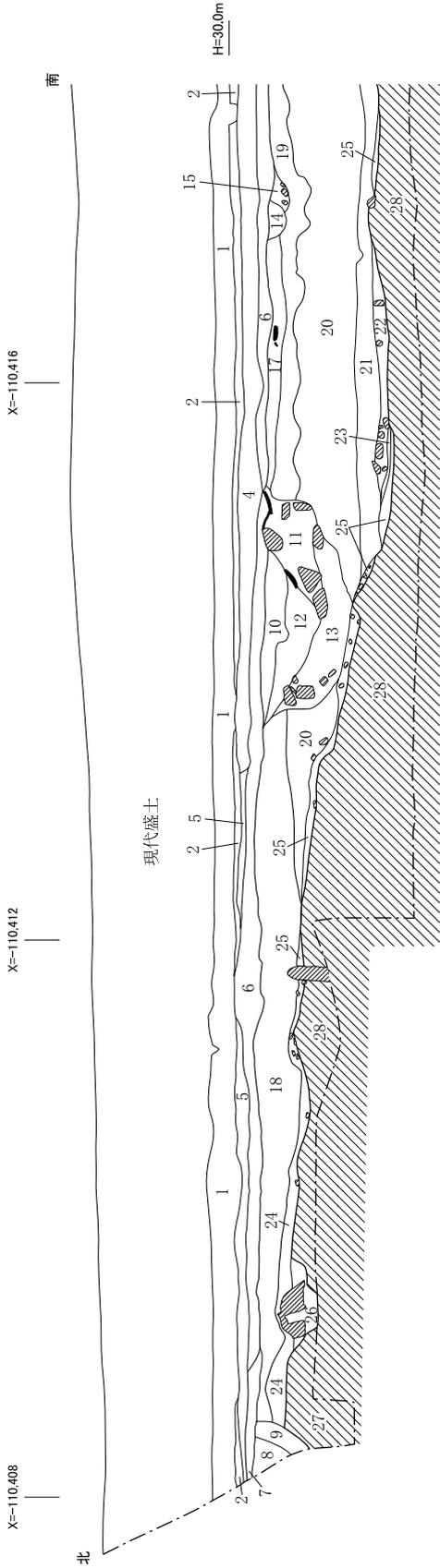


第1面〔平安時代後期〕平面図（1：100）

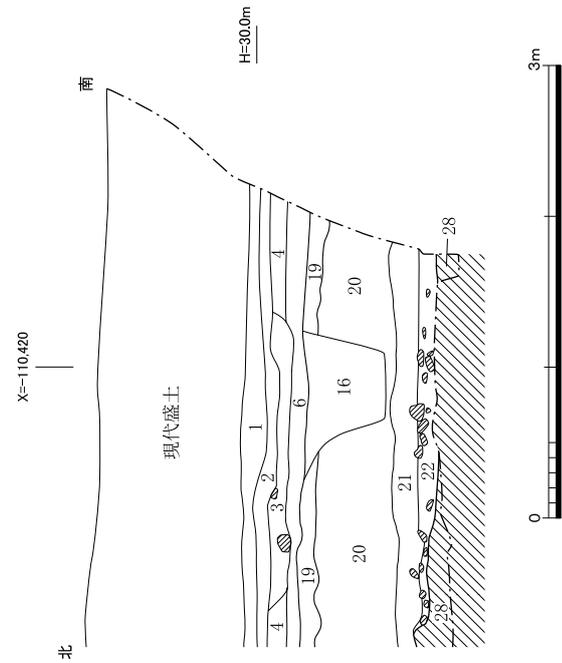


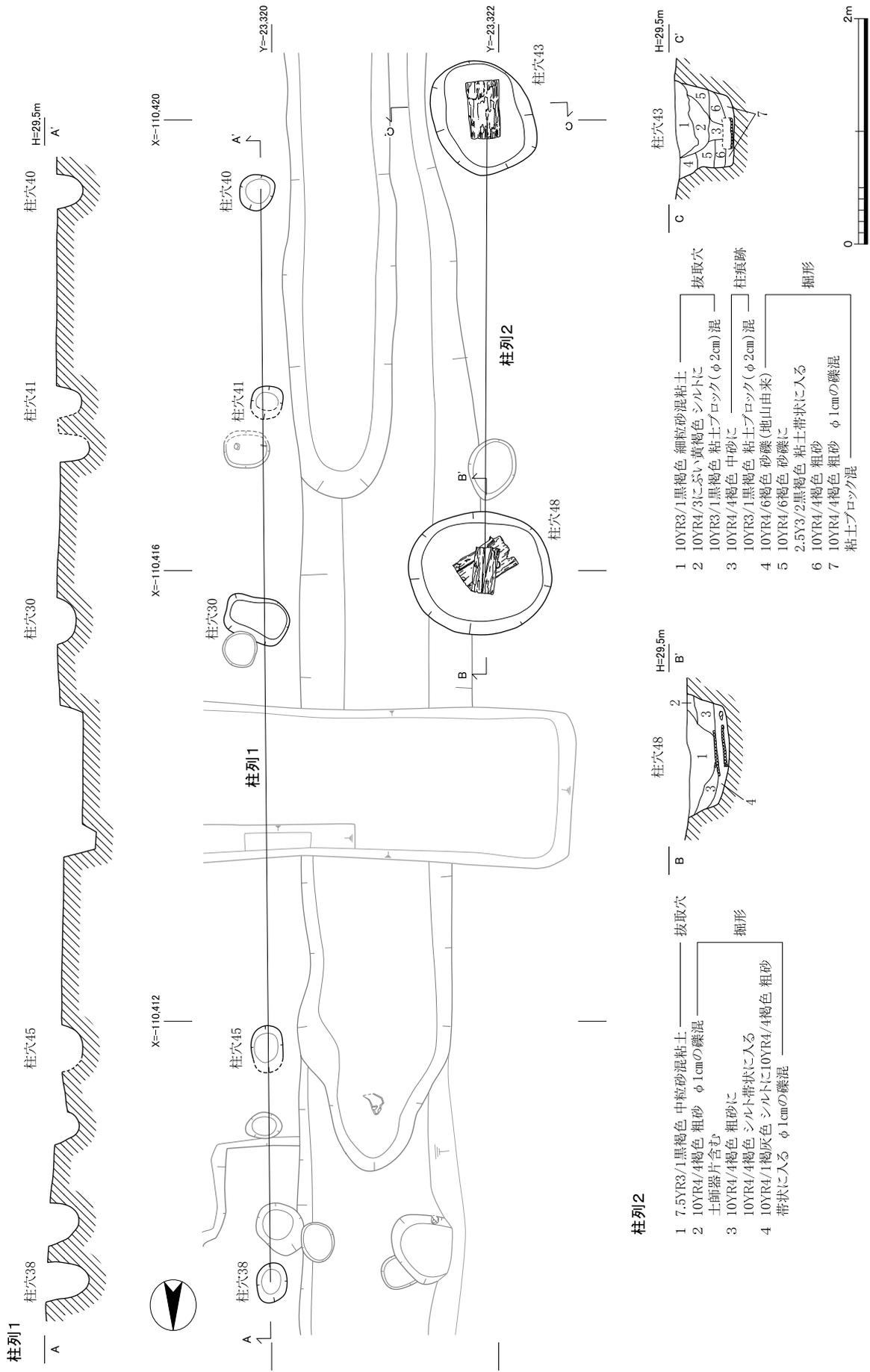
第1面〔鎌倉時代〕平面図（1：100）

調査区東壁断面図 (1 : 50)



- 1 10YR3/1 黒褐色 細粒砂混粘土 炭化物片混
- 2 10YR3/1 黒褐色 砂混粘土 φ0.5~1cm 礫混
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 細砂混粘土
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂~中砂混粘土
- 5 2.5Y4/1 黄灰色 中砂 φ0.5~1cm 礫混
- 6 2.5Y6/6 明黄褐色 砂礫 鉄分沈着
- 7 7.5Y4/6 褐色 粗砂 鉄分沈着
- 8 10YR3/1 黒褐色 細砂混粘土
- 9 2.5Y3/1 黒褐色 砂礫混粘土 φ0.5cm 礫混
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂混粘土
- 11 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混粘土
- 12 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混粘土 粘性強い
- 13 10YR4/1 褐灰色 細砂混粘土
- 14 5Y2/2 オリーブ黒色 細砂混粘土 炭化物片混
- 15 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混粘土 φ5cm 礫混
- 16 2.5Y4/1 黄灰色 砂礫混粘土
- 17 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 炭化物片・土器小片・瓦混
- 18 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂混粘土にφ5~10cmの10YR3/1 黒褐色 粘土ブロック混
- 19 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混粘土
- 20 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混粘土 粘性強い
- 21 5Y2/2 オリーブ黒色 粘土混細砂
- 22 5Y2/1 黒色 細砂混粘土
- 23 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
- 24 10YR3/2 黒褐色 粘土混粗砂 φ1cm 礫混
- 25 7.5YR4/1 褐灰色 細砂混粘土
- 26 N4/0 灰色 中砂~粗砂
- 27 10YR4/2 灰黄褐色 砂礫 φ1~2cm 礫混
- 28 7.5YR4/4 褐色~2.5Y3/2 黒褐色 砂礫 φ3cm 礫混





柱列1・2実測図(1:50)



1 2区第2面全景（北から）



2 3区第2面全景（東から）



1 1区第1面〔平安時代後期〕全景（北から）



2 1区第1面〔鎌倉時代〕全景（北から）



1 流れ24高まり検出状況（北西から）



2 流れ24高まり礫敷き検出状況（南西から）



1 流れ24礫敷き81検出状況（北東から）



2 3区流れ24検出状況（北東から）



1 流れ24ウシ下顎骨出土状況（南西から）



2 流れ24瓦出土状況（北東から）



3 流れ24漆器皿出土状況（北東から）



4 流れ24木皿出土状況（南西から）



5 流れ24櫛出土状況（西から）



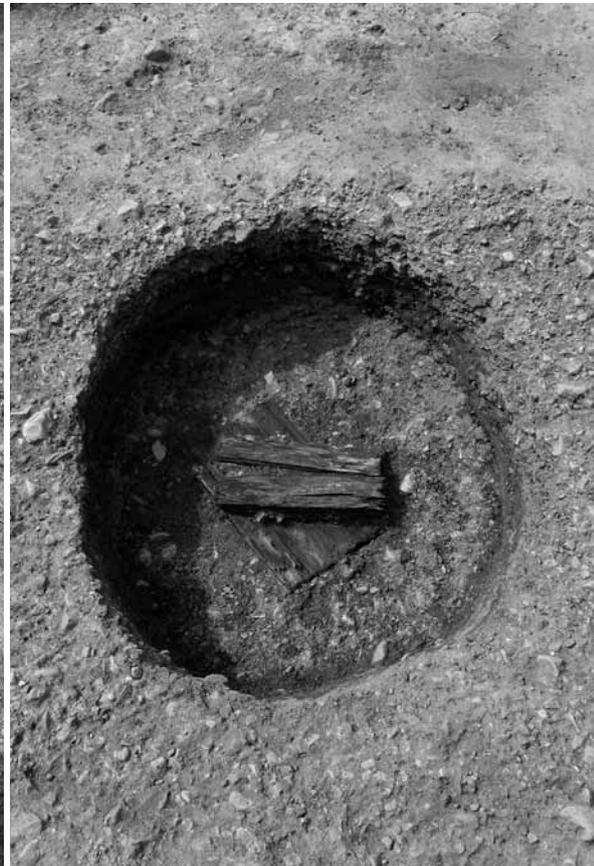
6 流れ24帯金具出土状況（北東から）



1 柱列2掘削状況（北東から）



2 柱列2柱穴43礎板検出状況（北東から）



3 柱列2柱穴48礎板検出状況（東から）



1 路面2検出状況（北東から）



2 1区拡張区全景（東から）



3 1区拡張区路面2検出状況（北東から）



4 溝55掘削状況（南から）



1 築地35遺物出土状況（北から）



2 築地35ウシ頭蓋骨出土状況（北から）



3 土坑20遺物出土状況（南東から）



4 土坑60遺物出土状況（南西から）



5 井戸64検出状況（西から）



4



6



11



22



16



24



30



17



34



20



36



38

土器類 1







瓦1



瓦3



瓦10



瓦11



瓦20



瓦22



瓦23



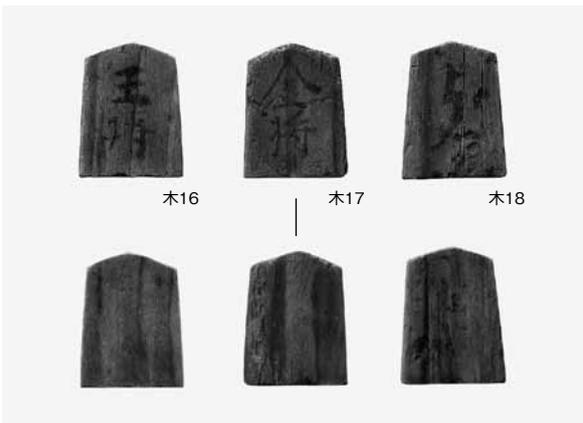
瓦24

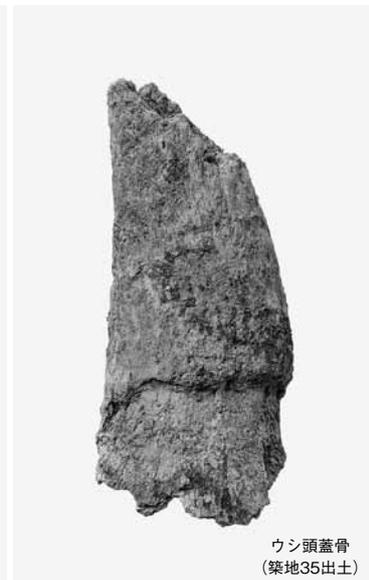
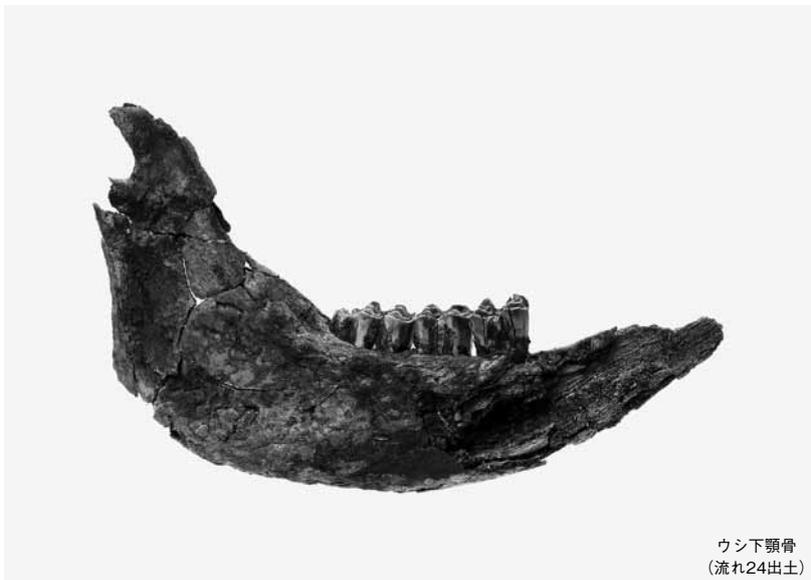
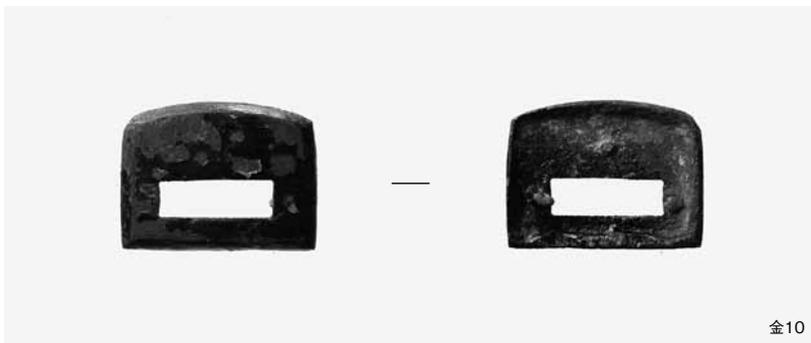
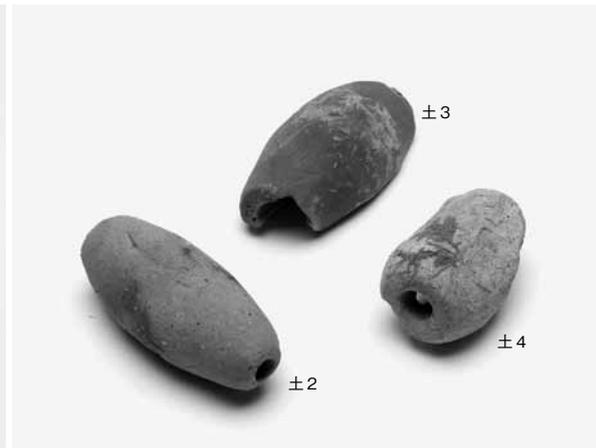


瓦26



瓦37





石製品、土製品、金属製品、骨

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょういちぼうごちょうあと							
書名	平安京左京四条一坊五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2024-6							
編著者名	松吉祐希							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2025年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 みぶぼうじょうちょう 壬生坊城町 26-4、27-6	26100	1	35度 00分 16秒	135度 44分 40秒	2024年8月 26日～2024 年11月1日	246㎡	新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	平安時代前期	流れ	土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類、木製品、石製品、土製品、金属製品、動植物遺存体		平安時代前期の流れを検出した。礫敷きが施され、邸宅内の庭園の一部として機能していたとみられる。 平安時代後期の坊城小路路面・東側溝・東築地基底部を検出した。		
		平安時代後期	路面、築地、溝、平坦面、柱列、井戸、土坑	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、土製品、金属製品、動植物遺存体				
		鎌倉時代	溝	土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2024-6

平安京左京四条一坊五町跡

発行日 2025年5月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151